

ドキュメント

アーツ秋田

構想

2017～2018

Document for Arts Akita



ドキュメント

アーツ秋田
構想

2017～2018

Document for Arts Akita













未来を創る“プレーム”を形にする

“（仮称）あきた芸術祭”として、２０１５年度（平成27年度）の「地方創生に向けた芸術祭」から検討をスタートして以降、“芸術祭は何のためにやるのか”、“芸術祭の先にあるものは何か”など、さまざまな疑問や指摘に向き合いながら、取り組みの方向性を模索してきました。

シンポジウムや「夜楽」、まちを楽しむ「まちの部活」などの取り組みを通じて、秋田市だけではなく、国全体が直面している人口減少や少子高齢化、コミュニティの衰退、中心市街地の空洞化、産業の担い手不足など、さまざまな課題を見つめ直し、人やまちが将来どうなっていくのか、子どもたちがどう生きていくかなど、改めて未来に思いを巡らせました。

そして、今まで直面したことがない課題に対して、これまでの行動や価値観が通用しなくなってきている現在、私たちは、その変化に対応していくために、“人やまちが自ら創造性を高め、新たな価値を見いだす力を発揮していく”ことを目指す、という取り組みの方向性にたどりつきました。

次の一歩を踏み出した今年度は、新たに「ディレクション会議」という検討体制を整え、昨年度見いだした方向性を踏まえて、未来のまちの姿を考えながら、その実現に向けてどのようなことができるのか、考えてみました。そして、未来に向けて人やまちが、自らの底力を高めていくことができるようにするために「アーツ秋田構想」はどうあるべきなのか、などについて議論を重ねました。その結果、私たちは、未来を創る“プレーム”として「アーツ秋田構想」の形や意味を見いだすことができたのでしょうか。

この「ドキュメント　アーツ秋田構想　２０１７～２０１８」では、ディレクション会議で積み重ねた議論や、「アーツ秋田構想」の検討過程でトライアル的にスタートした「まちなかがっこぅ」（まちを学校に見立て、授業はないけど部活はある）この学校には、既に10個以上の部活ができました）について、今後、取り組みを進めていったときに、進んできた道を振り返り、見つめ直せるようにまとめました。

どうぞ私たちの試行錯誤の過程をご覧ください。

【秋田市企画調整課】







目次

02 ●未来を創る〝フレーム〟を形にする

05 ●ディレクション会議
06 ■今までの価値観・考え方からの脱却……第1回ディレクション会議（2018.4.26 秋田市庁舎にて）
08 ■チャレンジできるフレームづくり……第2回ディレクション会議（2018.5.16 秋田公立美術大学にて）
10 ■新しい生き方を肯定する……第3回ディレクション会議（2018.6.1 秋田公立美術大学にて）
12 ・ディレクション会議 ANOTHER SIDE……〈担当者コラム〉
16 ■生き残っていくということ……第4回ディレクション会議（2018.7.11 秋田公立美術大学にて）
18 ・ここでちょっと振り返り……〈担当者コラム〉
19 ■〝言葉〟……第5回ディレクション会議（2018.7.31 秋田公立美術大学にて）
22 ・ディレクション会議メンバー

23 ●アーツ秋田構想
24 ■「文化創造のまち」へ【アーツ秋田構想】
28 ・アーツ秋田構想……〈担当者コラム〉

29 ●まちなかがっこぅ
30 ■「まちなかがっこぅ」開校！……〈担当者コラム〉
32 ■まちの部活を紹介……（2018.6.30、秋田拠点センターアルヴェにて）
40 ・「まちの部室」考……（2018.10.6、なかいち広場にて）
41 ■部活はじめました。……まちなかがっこぅ校長　徳利八十郎
46 ■まちなかって、もっと楽しくなる！……
52 ・「まちなかがっこぅ」のこれから……

53 ●ネクストステップ

ディレクション会議

会議メンバーは、秋田公立美術大学の藤浩志さん、服部浩之さん、石倉敏明さん、秋田商工会議所の渡邉靖さん、秋田魁新報社の安藤伸一さんを中心に秋田市企画調整課の齋藤一洋課長が加わりました。

人やまちが創造力を高め、今のまちに新たな価値を見いだし、私たちの中にまちへの愛着や誇り、未来を創る力を育んでいく。そのような未来に向けた創造的な循環を目指すためのディスカッションのスタートです。

秋田公立美術大学の「秋美祭2018」模擬店

今までの価値観・考え方からの脱却

第1回ディレクション会議

2018・4・26
秋田市庁舎にて

「アーツ秋田」で、まちづくりにおける一つの将来像を見据えたい



齋藤一洋課長（秋田市企画財政部企画調整課）

プロジェクトの位置づけとして秋田市の「芸術・文化によるまちおこし」の推進と、その先に見据えるまちの将来像の一つとして、例えば「文化的・創造的な都市」につなげるといったことを旧県立美術館や中心市街地を活用しながら継続的にできればと思っている。

今年度のディレクション会議では、まちづくりの将来像、アーツ秋田の取り組みの内容などを検討しながら、本市に美大があるアドバンテージや役割、この土地で何を深めていくのかを話し合っていきたい。

また、２０２０年度には、旧県立美術館が（仮称）秋田市文化創造交流館としてオープンする予定である。中心市街地を芸術文化ゾーンとして充実させていく計画もあり、「アーツ秋田」での取り組みも合わせていきたい。――**齋藤**

「こうあるべき」より、興味、関心のあることから

プロジェクトの位置づけとして「まちづくり」「まちおこし」とあるが、「人づくり」のように別の視点を入れて、今までの価値観や考え方から脱却することが必要なのでは？

まずは人や活動などがあって、やるべき内容をしっかりつくること。体系をつくり、つなげていくことで予期しない進み方が見えたりする。そのためにどういう仕組みにするのか、どういうことをしていくのかという視点が必要。「こうあるべき」というのを切り捨てて、興味関心のあることから始めるべき。――**藤**

若い世代をターゲットにする（若い世代が出会い、体験できるものに）

「つくる」という言葉から、「若い世代」がメインになると思う。14歳の時に見たり聞いたり、出会ったり経験したりしたことがその人のベースになると言われている。中学生などに対しても、何らかの取り組みが必要と思う。学校の先生と一緒に勉強会をするのもいい。[*1]アーティスト・イン・スクールや中学生が展覧会を実施してみるというような企画をしているところもある。――**藤**



藤浩志さん（美術家）



ディレクション会議がスタートした（秋田市役所会議室にて）

*1 アーティスト・イン・スクール
アーティストなどが学校に出向きワークショップや授業を行うこと。

新たな活動や価値を生み出す展開を

２０１７年度の「夜楽」やシンポジウムでは、「秋田の課題を浮かび上がらせる」ことができたが、その一方で「課題はあっても秋田はいい」という「現状肯定」に引っ張られる部分が見えた。本来は「未来の秋田をどう創るか」という意識のもと、新たな活動や価値が生み出されるような展開をしたかったのだが、そこまでには至らなかった。

今の秋田がいいか悪いかではなく、今の秋田をしっかりと認識して、未来に向けてどう動くのかということ。そう考えると、ぜひ若い人に関わってほしいと思う。――**石倉**

アートは問題解決ではなく、問題提起の技術

「混浴温泉世界」や「in BEPPU」といったプロジェクトを行っている大分県の別府市では「アートは課題解決ではない。問題提起だ」と明言しており、アーツ秋田においてもこのスタンスは参考になる。社会工学的な問題解決よりも、思いがけない発見や提起が必要。――**石倉**



石倉敏明さん（人類学者／神話学者）

成長する線同士がつながり、動きが波及していくように

まち全体の隙間や余白の活かし方を考えたい。市民プロジェクト的な視点とプロフェッショナルの視点の両方が必要だと思う。しかし、「市民プロジェクト」と「刺激プロジェクト」という安易な分類には賛成できない。専門性を活かした、日常の中にある変化が重要。

秋田市は県全体の文化が集まり、国内外のさまざまな文化と混ざり合うコンタクト・ゾーンでもある。そういう地域性を踏まえて、人やモノ、情報が出会い、つながる結節点としてのあり方、ネットワークという視点も大事では。個人同士がつながる「ネットワーク」の関係性は、互いに成長する線同士がからまり合い、変容する動きが全体に波及していく「メッシュワーク」の関係性に発展していく。

博物館・美術館・交流館のあり方も根本的に考え直す必要がある。現状では類似した機能を持つ「多目的スペース」が重複している。例えば、（仮称）秋田市文化創造交流館は既存の文化施設とは違う役割を担ってもらい、この施設だけではなく芸術文化ゾーン全体をさまざまな体験ができる場、新たな価値が生み出されていく場にしていくという方向性はどうか。そして「パブリック」の概念、捉え方を変える視点があっても良いと思う。――**石倉**

若い世代が動けるフレームをつくる

トップダウンの「まちづくり」「まちおこし」ではなく、ボトムアップで若い人が動くフレームをつくるといいのではないか。秋田市に公立美術大学はあるが、若い世代に「圧倒的な体験」をさせられる企画や場がない。一方で、部活プロジェクトのような自分たちが組み立てる機会や場もあっていいと思う。面白い展示や企画をつなぎあわせるプログラムがあるといい。「継続する（無くならない）拠点」も必要。――**服部**



服部浩之さん（インディペンデント・キュレーター）

場所の開き方を考える

施設や場の使い方が固定されてしまっている。既存の概念、価値観に縛られているように感じる。その一つとして、例えば、秋田は現代アートを実践、展示できる場が少ない。壁にビスが打てないなど、現代アートが求める展示手法に柔軟に対応できる施設がない。「使える空間」としての「場所の開き方」を考えていく必要があるのではないか。あわせて県立美術館・千秋美術館も連動した取り組みをするような新たなフレームをつくるなど、学芸員だけでなく組織としてのマインドチェンジも重要だ。――**服部**

チャレンジできるフレームづくり

第2回ディレクション会議

2018・5・16
秋田公立美術大学にて


会議は進む

更新することで、エリアに適した作品や活動が定着していく

パブリック・アート[*2]については、芸術祭[*3]でもアートプロジェクト[*4]でも、パーマネント[*5]であることと、テンポラリー[*6]であることの二者択一に縛られていることが問題だ。作品によって旬が違うのに、パブリック・アートにしてしまうとパーマネントであるかのように扱われてしまう。本来であれば、時間軸で更新されていくべきなのに。

作品が入れ替わった方がいい場所、そのまま残った方がいい場所という見方や仕組みも必要だ。こうした循環が行われることで、徐々にそのエリアに適した作品や活動が定着していくことになると思う。時間軸を考えながら、今のまちにいろいろチャレンジできるフレームをどうつくるのかだ。――**藤**

＊2 **パブリック・アート**
美術館やギャラリー以外の広場・道路・公園・空き地など公共空間に設置される芸術作品。または、パフォーマンスやデモンストレーションなど、公共性を持ったアート・プロジェクト。

＊3 **芸術祭**
芸術鑑賞や作品発表の機会として、アーティストの作品やプロジェクトを広く一般に公開する、期間の限定された祭典のこと。

＊4 **アートプロジェクト**
アーティストや市民、観客、群衆などさまざまな主体が関わる、ある目的を持った継続的なアートの実践形態のこと。

＊5 **パーマネント**
永久に。人工的または自然によってつくられた物・物事が限りなく永続すること。

＊6 **テンポラリー**
一時の。臨時の。

つくる人、活動、態度など、トライ（挑戦）が見えるまち

場所や活動の開き方の一方で、閉じ方も大切だ。いい作品をつくるためには時間が重要で、長時間を掛けてつくれる現場、環境があるといいのではないか。それをゆっくりと開いていくということができればと思う。

ディレクション会議にあたって、「文化的・創造的な都市」という表現があったが、ラボシティ[*7]という考え方がある。つくっている人、活動、態度がそこにあり、トライ（挑戦、創造）している姿が見えるといい。さまざまな出会い、予想しないものがそこにあるということが大事だと思う。例えば、中心市街地が学びの場になるような。――**藤**

＊7 **ラボシティ**
都市の中で実践的に反復されるさまざまな「都市の実験」を編集していくことで、新たな都市像を構築する都市モデル（慶應義塾大学SFC研究所）

変化していく、生態系につながる

〝変化〟というものが前面に出ていった方がいいのではないか。朽ち果てていく、流動していくということは「生態系」[*8]につながる。継続していくことが大事で、完成させてはいけない。5年、10年後に意味がわかり始めるというのもいい。――**藤**

＊8 **生態系**
全ての生き物は他の生き物と関わり合いを持っている。そうした生き物たちと、それらが生きる自然環境をあわせたもの。

土地に根ざしながら、空間と時間を開いていく

例えば、台湾にはお寺が多く、これまで「お参りするところ」という認識だったのだが、お寺同士を連携させて研究やアーカイブ[*9]、展示が一緒になった取り組みを実施するようになった。秋田市でも秋田に縁のあるアーティストをアーカイブしていくという視点も必要ではないか。土地に根ざしていくこと。土地に根ざしながら、意味のある空間と時間の開き方についてデザインが必要ではないか。――**石倉**

＊9 **アーカイブ**
記録保存。アーティストの活動や調査・研究活動などを記録に残し、未来に伝達すること。

レジデンスやリサーチ、既存施設の見直しは秋田に価値を生み出す

2012～2013年に県が「あきたアートプロジェクト」の一環で行った鴻池朋子さんの「東北を開く神話」という企画には、市民作家がたくさん関わり、人材育成にもつながったと思う。[*10]アーティスト・イン・レジデンスや[*11]リサーチは、最終的には秋田に価値を生み出す結果につながる。

他方、同時期に行われた旧県立美術館から新県立美術館への移行は、さまざまな点でリサーチや施設面・制度面での検討が足りていないため、既存の県や市の施設はアーティストにとって関わりを持ちにくい空間となってしまっているのではないか。


さまざまな意見が出る

千秋美術館も優れた展示を行っている反面、プロジェクト型のアートや現代芸術の多様性に対しては可能性を閉じてしまっているように見える。まだ評価の定まっていない芸術領域を開拓し、コレクションや企画展を通して、秋田に在住するアーティストを支援する活動も重要ではないか。

博物館や美術館の枠を超えていく、既存の概念を変えていくということを大切にしたい。その中で、将来は既存の建物や空間のあり方を大胆に組み替え、現代のニーズに即してどう使っていくかということを意識する必要がある。――**石倉**

＊10 **アーティスト・イン・レジデンス**
アーティストを招聘して、滞在しながら創作活動を行ってもらうこと。

＊11 **リサーチ**
調べること。研究すること。アーティストが作品をつくるにあたり、その地域の歴史や社会など、さまざまな事象を調査、研究すること。

価値は変容していく

活動をつくることと同時に、それを蓄積・記録・保存・検討していくことが大切。朽ち果てていく、腐っていって価値が生まれ変わっていく。その経過を残し、受け継いでいくことで、その後も価値の変容が続いていく。そのためには、情報を参照することのできる研究施設や、ドキュメント・カタログなどの研究資料の蓄積が重要。

現状では、秋田公立美大も研究設備が不十分で、もっぱら教育的な機能にとどまっている。秋田市内で活動するアーティストの実態を把握し、その活動を支援する作品の記録保存という営みも少ない。秋田の芸術文化行政は、この点をあまりにも軽視しているため、全国的に影響力を発揮するアクションを起こすことが難しい。――**石倉**

場所と時間を重視して「かかわりしろ」をつくる

アーティスト・イン・レジデンスを大胆にやるのはどうか。「創り出せる場所」が必要で、新しいものを創ることを意識する。創る場所や時間を重視することで、他の人との「かかわりしろ」もできる。秋田の問題で終わらないものの方が面白い。

既存の美術館・博物館とは異なった場として、新たな価値を生み出していく契機になるとよい。――**服部**


グラフィックレコーディング（＊12）担当の平元美沙緒さん

＊12 **グラフィックレコーディング**
会議や討論会における議論を、絵や図で可視化して記録すること。

新しい生き方を肯定する

第3回ディレクション会議
2018.6.1
秋田公立美術大学にて



第3回ディレクション会議のグラフィックレコーディング（一部）

「文化的・創造的な都市」とは？

「文化的・創造的な都市」については、いろいろな自治体などが取り組んでいる「文化創造都市」というイメージや表現ではいまさら感がある。違う概念を出したいが、「創造」の言葉には時間の蓄積が感じられない。まちなかにあるものが更新されていくこと、朽ちていくことも重要。じわっと変化して、生まれていく景観がいい。そういうものを概念化していきたい。変化する価値を言語化するのがいいのではないか。――**藤**

「のんびり」[*13]というタイトルは態度を表明していてよかった。人口減少は簡単には止まらないし、止まることがいいかわからないけど、「のんびり」はそうした課題を含めて受け入れる態度を示していた。

「足し算だけではない」ということを認識しないといけない。「創造」は何かを生み出していく、生み出し続けるという印象を抱いてしまうが、目指すのはそれではない。足し続けていくと、必ず不要なものがいろいろ出てくる。――**服部**

デトロイトでは「創造的縮小都市」などという言い方もしていたと思う。椙本歩美先生（国際教養大学）や山崎亮氏（Studio-L、東北芸術工科大学）は、「縮充都市」という言い方をしている。――**齋藤**

＊13 **のんびり**
秋田県が2012～2015年度に季刊発行していた「秋田からニッポンのびじょんを考える」フリーマガジン。

＊14 **「創造的縮小都市」**
馬場正尊・他共著「CREATIVE LOCAL」での記載。「縮小先端都市」という表現もされている。

「観光」と「学び」という視点

教育の概念が変わってきて、学んだり、体験したりして、人として変化していくためには「観る」ことが大切だ。「観光」と「学び」という視点も考えていいのではないか。訪れた人たちに、秋田で何を観てもらうか、何を学んでもらうか。そして、自分たちが、訪れた人たちから何を学べるか、だと思う。秋田でどういう時間を過ごしてもらえるか考えると良い方向になるのでは。土地の生活や日常を体験してもらうことで、土地に根ざす深い生活感や日常が開かれていく。

訪れた人との接点をどうつくるのか、そうしたコンテンツをどのくらい提供できるのかを考えてもいい。アートに限らずコーディネーターはあらゆるものに必要で、ソムリエのような人がいてもいいと思う。――**藤**

人と人とのつながり

デスティネーションキャンペーン[*15]という取り組みがあるが、体験型のものができないかというリクエストがある。あくまで小規模のものであったとしても、体験は人と人とのつながり、触れ合いが生まれるものであり、とても大切だ。――**渡邉**


渡邉靖さん（秋田商工会議所）

＊15 **デスティネーションキャンペーン**
デスティネーションとは英語で行先や目的を表す言葉で、それに宣伝を表すキャンペーンを組み合わせたJRグループの造語。

歴史などの勉強会は、外の人、観光客にも響くかもしれない。そうした動きが市民の中から自発的に出てくると良い。――**藤**


「文化的・創造的な都市」を目指すと想定したロードマップや前回までの会議における意見を踏まえたコンテンツなどを叩き台として意見交換が始まった

つくる過程を見せ、新しい生き方を肯定する

伝統工芸品から新しいものまで、つくる人たちや活動が見える場所をつくっていくのも面白い。それが一か所に集まるのではなく、まちに溶け込んでいるのがいい。完成形を見せるのではなく、つくっていく過程を見せるのが大事。都市計画などのような形ではなく、まずは「点」でやって、それがじわっと広がっていくのを見せられたらよい。――**藤**

つくる姿というより、プロセスをどうつくっていくかが重要となる。もう既に働き方の変革は始まっているが、これからの時代は複数の職能をもって生きていく時代になると思う。働き方の転換につながるようなプロジェクトであってもいいと思う。プロジェクトをやっていくことで、新しい職能がつくられていくというのはどうか。新しい生き方を肯定するというと、面白そうな人が集まってくることにもつながると思う。人を育てることと、受け入れていくことが大切だ。――**服部**

実験的なレジデンス・プログラム

実験的なことが試みやすいレジデンスをやってはどうか。やりながら見えてくるものがあるはず。規模や期間にいろいろな差があってもいいと思う。そうした拠点（場所）は旧県立美術館だけではなく、まちなかで仮設的なものをつくってもいいと思う。空間を考えられる人が関わりながら、建築的なプロジェクトを入れていくのもいいのではないか。――**服部**


会議での発言を、グラフィックレコーディングで可視化する

担当者コラム

ディレクション会議

ANOTHER SIDE



『ドキュメント
アーツ秋田構想
2016～2017』

私たちは、ディレクション会議での議論と合わせ、昨年度の振り返りをしてみました。『ドキュメント　アーツ秋田構想　２０１６～２０１７』（以下、「ドキュメント16～17」）です。ご覧になった方もいると思いますが、昨年度開催した「夜楽」《秋田のリアルから未来を考える対話シリーズ（全３回）》や、シンポジウム「辺縁と創造のネットワーク～地域芸術祭を超えて～」について、ゲストの皆さんから気付かされたことを「ノート」としてまとめています。

■ディレクション会議に向けて

私たちは、ディレクション会議を進めるにあたって、会議で検討を深めるべきテーマの洗い出しをしました。まずは、「ドキュメント16～17」の序文に記載されている昨年度までの検討の受け止めから振り返ってみます。

今年度（平成29年度）は、「あきたを学ぶ。あきたで創る。～人と土地とアート～」のテーマのもと、たくさんの方々の力をお借りし、秋田の暮らしや人・活動など「日常」を学ぶ「夜楽」と、アートを切り口にまちに積み重なっている、普段気付かない歴史や文化などの「超日常」を考える「シンポジウム」を経て、私たちの取り組みの位置づけを見いだすところまでたどり着いたと感じています。【「ドキュメント16～17」の序文（抜粋）】

まずは「自分たちの住むまちを知る。自分がこれからも暮らしていくまちを考え、関わる場をつくる」という市民を中心とした〝日常〟を見つめ直す（あきたを学ぶ）視点と、「視点を変えると気付く、日常にひそんでいる新たな価値」、「まちに新たな化学変化を起こす」という〝超日常〟に気付き、創造する（あきたで創る）視点が必要と考えました。

そして、市民を中心とした取り組みのベースとして、「まちに関わりたい」、「自分も何かできるのでは」などの思いを持つ市民を巻き込み、「楽しい人が集まることで楽しいまちになる」ことを目指して、平成30年2月から〝まちなかがっこぅ〟（部活プロジェクト）をトライアル的に開始しました。

自分の興味・関心を具体的な形、活動にしていく取り組みですので、まちの当事者が増えていくことにもなりますし、私たちが想像もしなかったような〝まちを楽しむ部活〟が動き出すことで「まちを使ってこんなことができるんだ」という気付きを与えることができるのでは？　と考えたのです。また、既にある活動も含めて、まちを楽しむ開かれた活動には、「活動が見える場所」も必要だな、などと思いを巡らせたり……。

こうした振り返りをし、考え方を整理しながらディレクション会議がスタートしました。

■ディレクション会議スタート

第１回ディレクション会議では、まずは大きな方向性として「文化的・創造的な都市」という未来の姿を見据えて取り組んでいくプロジェクトはどうあるべきか、といった視点で、いくつかのテーマを示して意見交換をしてもらいました。

〈テーマ〉
・「文化的・創造的な都市」の理念
……将来のまちの形やあり方とその名称
・「アーツ秋田」（または文化的・創造的な都市）のフレームと継続性
……取り組みが本格化する（旧県立美術館を活用する（仮称）文化創造交流館との連携のありかた）２０２０年と想定）までのロードマップとその後の継続性
秋田市に公立美術大学があるアドバンテージ
旧県立美術館を活用する（仮称）文化創造交流館との連携のありかた
・プロジェクトにおける秋田らしさ（地域性）
・文化創造拠点（旧県立美術館）のあり方
……まちなかの拠点のあり方やエリアマネジメントの視点　など

第２回では、作品・表現の永続性の話題も出ました。〝公共空間に設置されている作品は、「パーマネント」のように扱われてしまうが、あえて「一時的」に置くこと、時間軸を意識して入れ替える視点も必要では？〟といったパブリック・アートに関する意見をお聞きできました。

「今あるものをどうするか」「新しいことをどう始めるか」の二つの取り組みが大事ということ、空間と時間の開き方を考えていく必要があること。行政職員としては、「土地に根差しながら、意味のある空間と時間の開き方」とは？　など考えることばかりでした。

第３回では、前回までの議論を踏まえつつ、市としての考え方をさらに深め、２０２０年を「文化的・創造的な都市の実現に向けたスタートの年」と想定したロードマップとコンテンツの案を提示して意見交換をしました。この時、私たちがまとめていたコンテンツは、次の三つです。

〈第３回会議で提示したコンテンツ（…これがどう変化していくか）〉
①アーティスト・イン・レジデンス等のアートの活用
②まちなかがっこぅ
（授業：日常・今の秋田を学ぶ）
まちなかがっこぅ
（部活：活動の創出・連鎖）
③拠点づくり

今見ると、少しずつ形が見えてきつつあるように感じませんか？　この後、他都市の事例を調査しながら、その一方で将来のまちづくりを見据えた継続的な取り組みという方向性を忘れずに、担当職員の中でも試行錯誤をしながら議論を重ねました。こんな時は、これまでの道のりを振り返ってみるのが一番ですよね。ということで、冒頭に記載した視点「日常と超日常」、「あきたを学ぶ。あきたで創る。」の具体的な取り組みはどうあるべきか、私たちは、ディレクション会議での議論を踏まえながら、もう一度「ドキュメント16～17」のキーワードをたどり、具体的な取り組みの柱を整理してみました。



『ドキュメント アーツ秋田構想 2016～2017』「あきたを学ぶ。あきたで創る。」～職員勉強会からの学び～ の記録

■LOOK BACK AGAIN

まず、「自分たちの住むまちを知る。自分がこれからも暮らしていくまちを考え、関わる場をつくる」という市民を中心とした〝日常〟を見つめ直す（あきたを学ぶ）視点についてです。

暮らしの楽しみ方を知ること、そしてこれまでの秋田を知り、これからの秋田を考えること。

これらのキーワードを受け止めて思い描いたのは、私たちの暮らす秋田市を舞台に、さまざまな人が多様な活動を楽しみ、つながり、輪が広がっていく、「人」が中心のまち。そんなまちの姿を思い描き、「部活」からスタートした「まちなかがっこぅ」を発展させ、継続的な「夜楽」やシンポジウムのように地域を学ぶ機会をつくり、まちへの関心を高め、活動につながる場として部室を考えていく「市民プログラム」を一つの柱とし、市民と日常に重心を置くこととしました。

シンポジウムにおいて、芹沢高志さんが「場所の精霊に聞いてみることが大事で、フィールドワークやリサーチによる学びと体験が、土地の記憶や時間の重なりを知ることになる」と言われたことや、高堂裕さんが「楽しみ方はひとそれぞれ　自由に楽しみ、その後の成果を期待する」、「すべてのことを楽しむことができる人が増えて欲しい」と言われたことも私たちの考えを支えてくれました。

次に、「視点を変えると気付く、日常にひそんでいる新たな価値」、「まちに新たな化学変化を起こす」という〝超日常〟に気付き、創造する（あきたで創る）視点についてです。

第1回「夜楽」の「境界をまたぐ磁場　地域の化学変化が見えてくる」というキーワードからは、市民がそこに行くと何かが聞ける、何かと出会える機会や場が身近にあること。

第2回「夜楽」の「日常の豊かさと美しさに気付く」や「地域と人を愛する10年後を考える」からは、芸術や文化、歴史に限らず、食や音楽、文学、まちの物語などを含めた多様な地域資源、さらには秋田で活動している人と取り組みを再認識すること。

そして、第3回「夜楽」の「まちに関わる人が増える状況をつくる」からは、まちを楽しむ活動とコミュニケーションポイントをつくること。「自分たちのバックグラウンドを知る　自分たちのやっていくことの意味を考える」、「日常の中の記憶言葉で伝える　会話を持つことが大事」、「風景の成り立ち、場所に持たせた意味を理解し、共感できる仕掛けをつくる」からは、まちの文化や歴史への興味・関心を高めること、


『ドキュメント アーツ秋田構想　2016～2017』
「夜楽」第2回「食と自然」をつなぐの記録

文化を通した学びや体験から、次世代の創造力、さらには未来を生きる力を育むものであること。「外の世界を受け入れる　境界・ボーダーを行き来する」からは、外からの刺激を得ることで、まちを見る視点を変え、日常と超日常を行き来すること。

これからは、市民プログラムで幅広く日常を学ぶことに加え、作家やアーティストが、外からの視点で秋田を表現したり課題を提起することで、このまちに暮らす私たちが気付きを得て、地域の価値を再発見したり、新たな価値を見いだす過程を共有していく。そんな場面を思い描き、県外・市外から作家やアーティストを招き、リサーチやフィールドワークで市民と体験を共有しながら、作品制作や表現のプロセスも公開していく「刺激プログラム」をもう一つの柱とすることとしました。

こちらも、シンポジウムで原万希子さんが話された「アートによって海を越えた世界を想像／創造する見えないものをアーティストが読み込み、場所にもたらすものを地域と共有する」がベースになって、たどり着けたと感じています。

そして、こうした人や活動が見えてくると、欠かせないのが「活動が見える」「活動を結びつける」場です。私たち市民とアーティスト・作家を結びつける場、視点でいうと日常と超日常を結び付ける場がまちなかに溶け込んで存在すると、そこに行けば何かと出会える、そして出会いがまちに化学変化をもたらすことになると思います。

また、さらに先を見据えると、日常的な活動の場や、超日常を感じられる場になることで、藤先生が言われるように「場所を開いていく　場所が経験していく」ことにもなり、拠点として使える場が増えることは、空間の使い方を見せることでプライベートとパブリックの境界を越え、まちを見る目を変えることにもなります。そこで、「まちの拠点づくり」を市民プログラムと刺激プログラムを結びつけるものとして、明確に位置付けることとしました。

人のつながりを生み出すものは何でしょうか？　私たち一人ひとりが語るということは、お互いが新たなことを知ることです。まちの拠点（場）と、交流により多様な活動や人のネットワーク（コンテンツ）を合わせることで、知識と人を知り、まちを見る目を変えられたり、できなかったことにトライできたりするようなクリエイティブなまち、許容力のあるまちにつながると整理しました。

2年前の検討のスタートは（仮称）あきた芸術祭。

しかし、「入り口の議論をとことんする」（芹沢高志さん）の言葉に後押しされ、市民プログラムをベースに、新たな気付きを得る刺激プログラムを並行させ、まちなかに「場」をつくっていくこととしました。この取り組みが続くことで、その先にまちの創造力を示すデモンストレーションとして「祭」が実現するのであれば、理想ではないでしょうか。



『ドキュメント アーツ秋田構想　2016～2017』シンポジウム「辺縁と創造のネットワーク ～地域芸術祭を超えて～」の記録

生き残っていくということ

第4回 ディレクション会議

2018・7・11
秋田公立美術大学にて

価値は模索から生まれていく

価値は創造するものではなく、模索の中で生まれていくような気がする。実験的とも言えるものであり、現場でいろいろな経験や失敗を重ねていくことが大事。いい活動があったとしても、見る人、欲している人などがいないとその良さがわからないし、味わえない。

各地のアートプロジェクトでは、訪れた人が観るだけでなく、どう過ごすのか、どう受け止めるのかが大事になっている。観光の視点と同じで、訪れた人たちとの関係が続いていくことが理想だ。――**藤**

接触体験で人間は変わっていく

訪れた人が来る前と来た後で変わっていく出会いの場、接触体験という考え方を取り入れていく。そこでアートに何ができるのかを考えるのは大事だと思う。既存のものに対してタブーを破っていくこと、そうした取り組みの積み重ねによりレイヤーができていくのがいいのではないか。

人類学では、Human Beingから、Human Becomingということが言われている。人間は変わっていくものであるということを表す言葉であるが、こうした考え方を踏まえることもいいのでは。芸術は人やまちが変容し、成長するプロセスに深く関わっている。――**石倉**

古いものを受け止め、未来につなげていく

人形道祖神[*16]に関するイベント（平成30年に秋田市や五城目町で開催した、秋田人形道祖神のスライド＆トークショー。昨年の「夜楽」にも登場した、小松和彦さんとイラストレータの宮原葉月さんが主宰している）に参加した際、その道の人たちだけではなく、広く若い人たちが参加していた。民間伝承や民間信仰などを受け止め、自らの生活を変容させ、生活をポジティブに変えていこうとしている人たちがいるように感じた。



大館市山田地区に伝わる「ジンジョ（地蔵）サマ」。体長約150㎝の男女の人形が複数立てられる



2018年に発行された『村を守る不思議な神様』。
著・小松和彦
絵・宮原葉月

アーツ秋田の取り組みの方向性に、朽ち果てていく、腐って新たな価値に生まれ変わっていくというものがあるが、古いものを受け止め、未来につなげていくということも一つのイメージだと感じた。

アーツ秋田を新聞記事にすることをイメージすることは難しいが、「まち全体を現代美術館にする」という見出しであれば、書けるような気がする。市民は、限られた人たちだけで楽しむような取り組みになることは望んでおらず、さまざまな人たちがイメージしやすいことが

[*16] **人形道祖神**
集落に疫病や災いなどが入って来ないように集落の境に祭られる神像。日本列島各地にあるが、秋田県は特に数が多く、大きさや形、素材（ワラ、木、石）など、集落によってさまざまなタイプがある。



第4回ディレクション会議のグラフィックレコーディング（一部）

大切だと思う。――**安藤**

秋田市という場所の特性を考える

行政の立場としては、秋田市をエリアとして市民が対象であるように考えてしまうが、「みんなでやる、楽しむことで未来を創る」のであれば、リサーチやフィールドワークの自由度の足かせにならないよう秋田市に限定せず、活動・発表・学びの場が秋田市であれば良いという考えもある。――**齋藤**

一つのベースキャンプが秋田市。秋田市がパレットのような役割を担い、古いものと新しいもの、内と外、自然と文化を混ぜ合わせることができる場と考えたい。秋田市という場所の特性を活かしていくことができればよいのではないか。

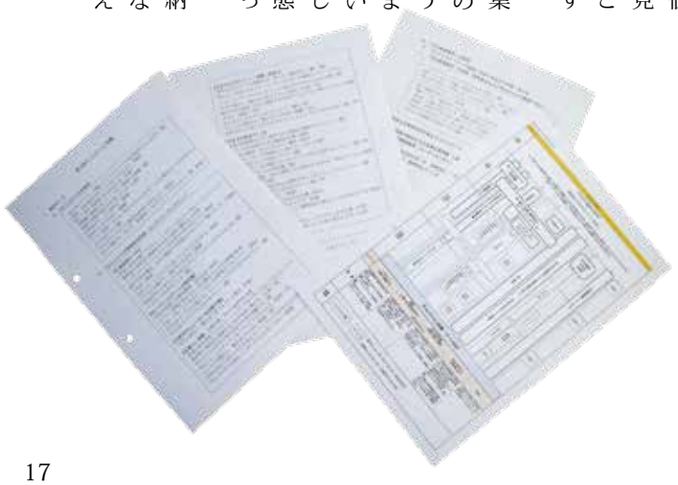
現状では中高年の男性中心の視点で、お酒やグルメなどの消費文化的な「催事」が中心となっており、竿燈祭りなどもかつてあった「祭事」の根幹の意味が失われ、若者が楽しめないまちになっている。若者自身が創り出す文化を大切にできるようにしたい。――**石倉**

なぜ「アート」なのか?

日常では、「アート」はあまり使いたくない言葉だ。アート、芸術、文化という言葉が邪魔になり、言葉が持つ既成概念に引っ張られてしまうことも多い。一般的に使われている「アート」と、僕らが思う「アート」は違う。今までの価値に対してそのままでいいのかと問いかけ、新しい価値を創っていくこと。新しいものを見つけていく、生き残っていくということだと思う。そういう態度を共有するということだろう。――**藤**

そもそも「アート」という言葉は、人によってかなり異なったものを想像すると思う。アートという形式を重視するのではなく、さまざまな行為に創造性や価値を見いだすこと、暮らしを営む中で新しい社会をつくっていこうという態度自体がアートにつながると思っている。――**服部**

「価値創造」というイメージも納得できる。狭い意味のアートではなく、生活に根差したものを広く捉えたい。――**齋藤**



前回までの議論を踏まえ、ブラッシュアップしたコンテンツ案やロードマップ案を叩き台に議論が進められた

担当者コラム

ここでちょっと振り返り

第4回までを振り返り、担当者として特に印象に残った言葉と、その受け止めをまとめてみました。

一つ目は、藤先生が発言した「プロジェクトの趣旨が『新しい価値』の発見にあるとすれば、価値は『創造』するものではなく『模索』していくものではないか？　だとすると『実験的』な取り組みであるべきで、経験を重ねていくことが大事」です。

確かにそうですよね。人口減少や少子高齢化が進む社会の中で、これまでの価値観にとらわれずに地域活性化に取り組むとすれば、「成長」というプラスだけではなく、何かを引き去る（または何かに特化する）ような「マイナス」することで新しい価値を生み出すこともあります。藤先生は別の機会に、「地域豊醸化」ということも言われていましたが、新しい価値や豊かさなどは、経験を重ね、失敗も糧にしないと見えてこないのかもしれません。

次に石倉先生の「人類学ではHuman Being からHuman Becoming ということが言われている。『人間はこうである』という定義から『人間は変わっていくもの』であるというもの」という発言。

これは深いですよね。そして、「アーツ秋田構想」実現のためのプロジェクトの性質を言い表しているのではと感じました。私たちは暮らしているまち・秋田市を知っているか？　まちの歴史や文化、そして活動や人を本当に知っているのか？　知ったつもりになっているけれど、知らないことの方が多いということを認識して、まさに秋田で学び、秋田で創ることで違う秋田を描いていくということなのではないかと思いました。

第4回からメンバーとして参加いただいた安藤伸一さん（秋田魁新報記者）も、このHuman Becomingという言葉を聞いてすぐに、「人形道祖神のイベント（小松クラフトスペースで開催）には、若い人が多く参加しており、民間伝承や民間信仰などを知ることで自分の生活を変容させ、生活をポジティブに変えていこうとする空気を感じた」と反応されていました。

あえて厳しい表現をしますが、「秋田には何もない」「秋田は何をやってもだめだ」と大人が口にしてしまうと、その背中を見ている若者は秋田に対して肯定的になれません。逆に、こうして秋田を知ること、しかも上の世代にとって当たり前であっても、若い世代にうまく伝わっていない歴史や文化を若い世代が新鮮に受け止め解釈することで、逆に私たち大人が学ぶこと、気付かされることも多いのではないでしょうか。

そして、服部先生が発言した「トップダウンのまちづくり、まちおこしではなく、ボトムアップで若い人が動くフレームをつくるといいのではないか」です。

行政という仕事の関係上、「まちづくり」や「まちおこし」という言葉を多く使いますが、未来のまちの姿は、このまちに暮らす人たち、関わる人たち、さらには訪れる人たちの思いから描かれていくものであって、そこからふつふつと湧き出てくるさまざまな動きが未来のまちを形づくっていくものだと思います。

このために行政はどんなことができるのか、服部先生が言うフレームをどうつくるのかということなんだと思います。同じような発言は藤先生や石倉先生からもあり、つながりのあるキーワードとして「新しい生き方を肯定する」、「挑戦する姿が見える」などとも未来のまちのスタンスを考える基本的な考えを示しているように思います。

こうして考えていくと、「アーツ秋田構想」は、なぜ「アート」なのか、「芸術・文化」なのか？　という問いにも答えられるような取り組みのスタンスをまとめることができてきたのではないでしょうか？

ロードマップと具体のコンテンツを実現するには、まだまだハードルはありますが、「アーツ秋田構想」は、秋田市の芸術文化によるまちづくり、そして「文化的・創造的な都市」を目指す考え方（方向性）として形になりつつあると感じました。

こんな状況を経て、第5回ディレクション会議は、「アーツ秋田」の方向性を「言葉化」することにこだわってみました。藤先生から「言葉をつくること」を提言され、私たちも「一言でアーツ秋田の方向性や姿勢を表せる言葉が必要」と思っていたこともあり、これまで同席をお願いしてきたフリーライターの方々に、ブレインストーミング的に言葉（コンセプト）の洗い出しをお願いしたのでした。

さて、第5回の意見交換は少し気楽に、そして改めて考えながら振り返ってみましょう。

全体像をどのように整理するか…ビジョンをつくる

秋田公立美術大学でも、（仮称）秋田市文化創造交流館（旧県立美術館）でも似たようなことをやろうとしている。一つにまとめた方がいいのではないか。根本にあるのは、全体像をどのように整理するかということで、その中で役割分担をしていった方がいい。── **服部**

赤れんが郷土館や民俗芸能伝承館、千秋美術館など、縦割りになっている文化施設に対して全体の仕組みをどのように入れていくか。施設はあるものの、しっかりとしたキュレーション[*17]ができているところがない。アウトリーチ[*18]もいまいちである。どういう人たちに対して、どういうものが提供できるのか、そういうビジョンをつくっていくことが必要。── **藤**

*17 **キュレーション**　美術館や博物館、図書館などにおいて収集された展示物や情報等を、専門家の独自の価値判断で整理すること。

*18 **アウトリーチ**　美術館学芸員などが、学校や集会所などのさまざまな場所に出向いて、アートに接する機会を提供する活動。出前授業やワークショップの開催など。

アーツ秋田の拠点＝（仮称）秋田市文化創造交流館（旧県立美術館）では？

アーツ秋田と（仮称）秋田市文化創造交流館（旧県立美術館）は、一緒に考えた方が良い。── **服部**

（仮称）秋田市文化創造交流館（旧県立美術館）は、アーツ秋田の拠点という認識。これまでディレクション会議で話し合ってきたことは、秋田市の芸術文化施策の方向性を示す構想であって、それを踏まえて、（仮称）秋田市文化創造交流館（旧県立美術館）では、施設の運営だけではなく、他の文化施設や公共施設、民間などとつながりながら、施設の外で未来に向けた動き、プロジェクトを進めていくということ。── **藤**

“言葉”

ディレクション会議の議論を踏まえ、言葉化チームが「アーツ秋田」、「文化的・創造的な都市」の概念を表す言葉を提示しました。

“言葉”
第5回ディレクション会議
2018.7.31 秋田公立美術大学にて



「言葉化チーム」より提案された数々の言葉を前に、さまざまな意見が飛び出してきた

A.nd プロジェクト

あ、んだ。の
ひらめきから、
みんなで楽しむ
プロジェクト。

犬だけじゃない、
#AKITA

街中年中、
創造夢中

このまちは、
ぼくらの
ラボラトリー

ここで
生まれた人も、
そうでない人も。

「秋田である」ではなく
「秋田になる」という「姿勢」を表すには
とても良いですよね。英語の文法からする
とBecoming Akitaになるのかな?
コンセプトとしても悪くない。

Akita Becoming

見慣れた景色、
見慣れた人。
だけどドキドキ。

北緯 39 度の
文化決戦。

見慣れない景色、
見慣れない人。
だけどワクワク。

小さなaは一人一人の
市民(リトルa)。そして大きなAは秋田市。
aの積み重ねとつながりがAを形作って
いく。市民プロジェクトがベースである
というコンセプトを視覚的にも表せるし、
イラストにもしやすいですね。

Amusing Akita

んでね

A.muse Akita

a/A

A.muse Park

TODO Creative

A Museum
Market

A Museum Marche

A.Museum
プロジェクト

A.Museum

コミッティブ
クリエイティブ

コミッティブ
サミット
プロジェクト

こみっと。
がりっと。

コミッティブ
サミット

まちづくりを
遊ぼう。

これは秋田弁であり、
かつコミットメントもかけてるよね。
秋田弁の「こみっと」は、ひっそり、静かに、
みたいな意味で、「こっそり」活動しているうちに、
その継続とつながりが「ごっそり」まちを変える
と面白いね。英語のコミットメント
にもつながるし。

こみっと。

まちは創造の
パレットだ

こみっとA、
秋田を
おもしろがる。

こみっと。
ばやっと。

こみっとサミット

あした、
あさって、
見漁って。

まちじゅう
クリエイティブ!

まちじゅう
クリエイティ部。

クリエイティブ
仕様都市 A
(クリエイティブ
しよう! 都市)

あきた
よりみチル。

あした、
あさって、
し漁って。

街にアートの
風が吹く。
人が振り向く
場所になる。

おばあちゃんの味、
それだって立派な
作品になります。

思いを声に。
好きをカタチに。

70 代と 20 代。
今日から
アーとも。

70 代と 20 代。
今日から
アートつながり。

人とまちに
アートの栄養を。

これは、わかりやすい。
コンセプトというよりは、その下の
サブタイトルとか、パンフレットに使う
フレーズに良いかも。

ひとりひとりが、
アーティストに
なれるまち。

まちは、みんなの
アートラボ。

まちラボラトリー

カンバスは街。
市民みんなが
アーティスト。

これもコンセプトにはなりうる。
姿勢ではないけど、まちの許容力、
懐の深さを表せる気がする。実験的なことが
許されるまち=ラボラトリー、化学変化が起きやす
いまちという意味になるし、「まちぜんたい」
の言葉が、公共空間を開いていく、
トライできるイメージも表せる。

それは、
街を育てるアート
プロジェクト。

いつもの街を、
いつも以上の街に。

まちを
美術館にする。

まちぜんたいが、
アートラボ。

まちは、
みんなの実験室。

毎日が、芸術祭。

五感で感じる、
まちづくり。

まちは、
美術館になる。

まちは、
博物館になる。

街を耕す、
アートを植える。

(仮称)芸術祭から脱却しつつ
あるのに、破れかぶれで「芸術祭」(笑)。
この姿勢が挑戦的で面白いかも。
まちの創造力が高まった将来、自然発生的に
その力を見せるデモンストレーションが
出てきて、それを、「祭」と呼ぶなら
理想だよね。

365日、
芸術祭。

スクラップしない
ビルド。

まちは、
実験室になる。

試験館

いつでもどこでも、
芸術祭。

年中、
発芽しちゃって
いいんです。

市民一人一人が生活
している姿と、日常での気づきが
イメージしやすいですね。
これもコンセプトというよりは
フレーズかな?

後出し
ジャンケンが、
一番強い。
遅ればせながら、
芸術祭やります

降りて歩きたく
なる街には、
アートの風が
吹いていました。

まちに、
クリエイティブ
タネをまこう。

クリエイティブの
タネをまこう。

クリエイティブの
芽を育てよう。

春夏秋冬、
芽吹いてる。

「おもしろい」を
つみあげるまち

まちぜんたいが、
おもしろラボ。

まちぜんたいを
おもしろラボに。

年中、発芽。

まちに、
ひらめきの
タネをまく。

まちぜんたいが、
おもしろ畑。

言葉化チーム(22ページ参照)が提案した「アーツ秋田」「文化的・創造的な都市」の概念を示す“言葉”と担当の受け止め



アーツ秋田 構想

新県立美術館のカフェ「光風」から見た旧県立美術館

ディレクション会議メンバー



服部 浩之
（インディペンデント・キュレーター）

1978年愛知県生まれ。早稲田大学大学院修了（建築学）。2009年-2016年青森公立大学国際芸術センター青森［ACAC］学芸員。アジア圏を中心に展覧会やプロジェクト、リサーチ活動を展開する。藤井光をディレクターに迎えAHA！［Achives for Human Activities!/人類の営みのためのアーカイブ］とも協働した「歴史の構築は無名のものたちの記憶に捧げられる」（2015年）など滞在制作を軸としたアーティストとのプロジェクトを実践。「十和田奥入瀬芸術祭—SURVIVE：この惑星の、時間旅行へ」「アッセンブリッジ・ナゴヤ」など。2019年に開催されるヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館キュレーターに選出された。秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科、美術学部アーツ&ルーツ専攻准教授。



石倉 敏明
（人類学者／神話学者）

1972年東京都生まれ。多摩美術大学芸術人類学研究所助手を経て、2011年より明治大学野生の科学研究所研究員。1997年よりダージリン、シッキム、カトマンドゥ、日本各地で「山の神」神話調査をおこなう。環太平洋の比較神話学や芸術人類学の研究に基づき、神話集、論考等を発表。共著・編著に『Lexicon現代人類学』『野生めぐり 列島神話の源流をめぐる12の旅』『人と動物の人類学』『道具の足跡』。高木正勝によるCD作品とのコラボレーションに『タイ・レイ・タイ・リオ紬記』（神話集）など。2019年ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館代表作家。秋田公立美術大学大学院複合芸術科、美術学部アーツ&ルーツ専攻准教授。



藤 浩志
（美術家）

1960年鹿児島県生まれ。奄美大島出身の両親の影響で大島紬周辺に遊ぶ。京都市立芸術大学在学中、京都情報社を設立。同大学院修了後、青年海外協力隊としてパプアニューギニア国立芸術学校に勤務し、原初的表現と文化人類学に出会う。帰国後、都市計画事務所勤務を経て、藤浩志企画制作室を設立。地域資源・適正技術・協力関係を活かした美術表現を志向し、全国各地でプロジェクトやデモンストレーション型の美術表現により「対話と地域実験」を実践。「ヤセ犬の散歩」「お米のカエル物語」「Kaekko」「Polyplanet Company」「藤島八十郎をつくる」など。十和田市現代美術館館長を経て、秋田公立美術大学副学長。



渡邉 靖
（秋田商工会議所経営支援部まちづくり推進課）

2002年秋田商工会議所に入所。2014年から経営支援部まちづくり推進課勤務。秋田市中心市街地活性化協議会、秋田市商店街連盟など、商業まちづくりに関わる業務を担う。また、東北六魂祭2015秋田、これが秋田だ！食と芸能大祭典などの観光振興・交流人口の拡大に取り組む。



齋藤 一洋
（秋田市企画財政部企画調整課）

1988年秋田市役所に入所。2009年から企画財政部企画調整課勤務。県・市連携文化施設整備や旧県立美術館を再生する（仮称）秋田市文化創造交流館整備、文化創造プロジェクトなど、芸術文化によるまちおこしの推進を担う。



安藤 伸一
（秋田魁新報社）

1996年秋田魁新報社に入社。文化部、社会部、政治経済部などを経て2010、11年に秋田市政担当記者としてまちづくりを取材。現在はデジタル部長として秋田魁新報電子版（ウェブサイト）の編集に当たる。
※第４回から参加

■言葉化チーム

ライターである髙橋ともみさん、藤島美香子さん、万屋隆さんが“言葉化チーム”を結成し、アーツ秋田や「文化的・創造的な都市」の概念を表す“言葉”づくりに取り組みました。

■記録チーム

会議におけるメンバーの言葉 …… 将来のまちづくりに向けた方向性を示すキーワードの数々を記録するのが、NPO法人あきた地域資源ネットワークを中心とした記録チーム。秋田公立美術大学の３人の教員の発言を中心に繰り出されるキーワードに、平元美沙緒さんのグラフィックレコーディングが伴奏するかたちでディレクション会議は進行しました。

「文化創造のまち」へ

【アーツ秋田構想】

■未来に生き残るために【背景・経緯】

人口減少や少子高齢化の進行、それに伴う地域社会の変化や経済、財政への影響など、**私たちを取り巻く環境が大きく変わりつつある現在、これまでの暮らし方や働き方、考え方や取り組みなどを、こうした変化に対応したものにしていくこと**が求められています。

そのためには、私たちが過去を学び、ありのままの今を見つめ直し、未来に向けた挑戦や失敗などの経験を重ねながら〝創造力を高め、発揮し、新たな価値を生み出していく〟ことが必要です。

生み出された多種多様な価値とそれを受け入れる寛容性が、私たちが住むまちを元気にし、未来の文化を創っていくものと考えます。

芸術文化は、人々の生活の中で精神的な支えとなり、まちに魅力を創りだし、生産や流通、観光など、産業や経済においても様々な影響を与えてきました。

秋田市では、第13次秋田市総合計画「新・県都『あきた』成長プラン」において、「ともにつくり　ともに生きる　人・まち・くらし」を基本理念に掲げ、この理念のもと「芸術文化・スポーツ・観光による都市の魅力向上」を成長戦略に位置付け、その重点プログラムの一つとして「芸術・文化によるまちおこし」を進めています。

アーツ秋田構想は、これまでの取り組みを土台としつつ、市民が様々な分野の専門家・研究者とともに学び、**未来に向けて新しい文化（価値）を生み出していくための創造的な取り組みを進めるという、今後の〝芸術文化によるまちづくり〟の方針**を示すものです。

■「文化創造のまち」の実現【目的】

市民や民間、行政が広く連携し、学生や市民団体、ＮＰＯ、教育機関、さらには医療機関や福祉施設など、**このまちに関わる者がまちづくりの当事者となり、様々な課題に向き合い、柔軟な発想（創造力）をもって多彩なプロジェクトを展開し、まちの未来を創っていく**ことを目指します。

■未来の文化（価値）を創るための仕組みづくり【方針】

市民が、未来の文化（価値）を創り、楽しむ活動を展開できるよう、次の3つを柱とした仕組みづくりを進めます。

①市民と専門家・研究者の協働

まちに関わり、まちを楽しむ活動の創出や連鎖を図るなど、まちづくりの基盤である市民と、日常に新たな価値を見いだし、又は新たな価値へと生まれ変わらせる力を育むなど、創造力を高める専門家・研究者との協働

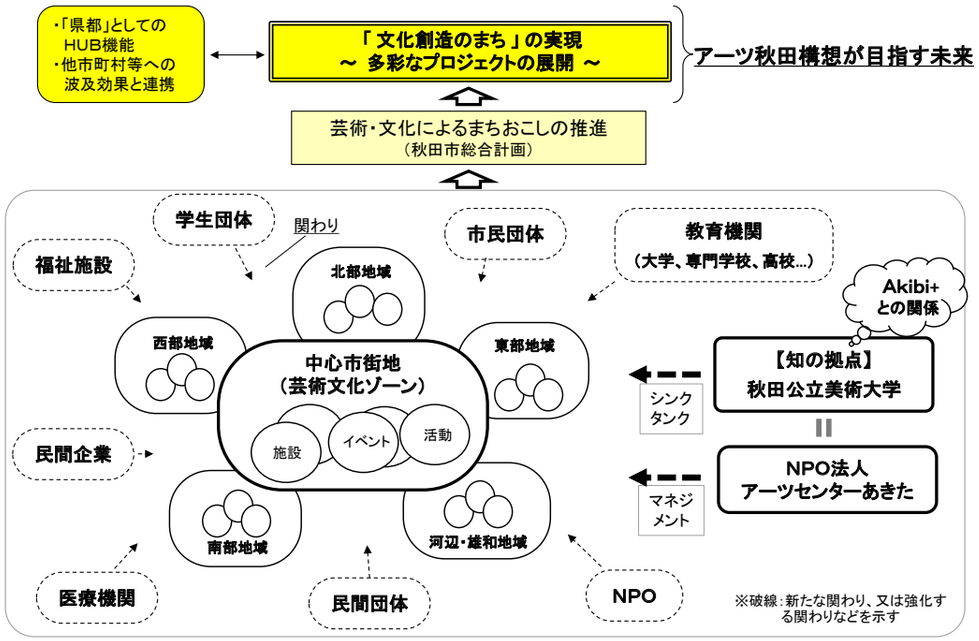
②実験的取り組みの展開

市民が社会課題に対して創造的な活動で向き合う取り組みにデザインや編集の思考を取り入れる、未来に向けた暮らし方や働き方、まちづくりなどの提案と実験的取り組みの展開

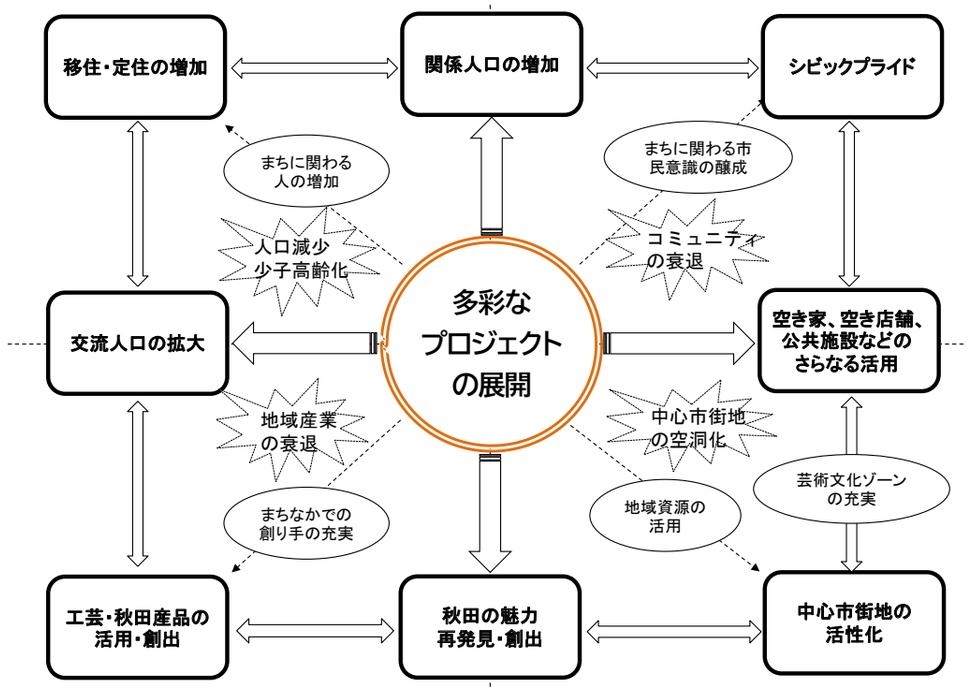
③多様な空間と時間の創出

未来に向けた活動を創ると同時に、その活動が蓄積し、互いに結びつくことなどにより、新たな文化（価値）が生み出されていく多様な空間と時間の創出

アーツ秋田構想



未来に向けた多彩なプロジェクトの展開イメージ



■取り組みが必要な部分

秋田市では、中心市街地を芸術文化ゾーンとして充実すべく、県・市連携文化施設の整備や旧秋田県立美術館の活用などに取り組んでいます。他地域においては、新屋ガラス工房や土崎みなと歴史伝承館等を拠点に、地域資源を生かした住民主体のまちづくりを進めています。

また、民間の動きとして、秋田市中心市街地活性化協議会が芸術文化ゾーン活用研究会を立ち上げ、行政や文化施設、民間事業者などの連携を図りながら、トライアル事業や情報発信を行っているほか、河辺・雄和地域では、河辺雄和商工会が中心となって「芸術の里かわべゆうわ」としてアーティストの誘致やアートの里づくりが進められています。

そして、秋田市には「まちづくりに貢献し、地域社会とともに歩む大学」を基本理念の一つに掲げる秋田公立美術大学や同大学が設立したNPO法人アーツセンターあきたがあり、芸術文化によるまちづくりを進める上での大きな強みとなっています。

こうしたこれまでの取り組みについて、中心市街地を例に、「主な活動①」と「文化施設（場所）②」の現状を、次の2つの軸においてみます。

・「市民 ～ 専門家・研究者」をつなぐ担い手（広さ・深さ）の軸

・「過去の文化（価値）を継承する活動 ～ 未来の文化（価値）を創る活動」をつなぐ活動の軸

「未来の文化（価値）を創る活動」を展開していくことが必要と分かります。

■文化創造プロジェクト【具体の取り組み】

芸術文化ゾーン（中心市街地）を重点エリアとしつつ、市域全体に広がるよう市民や民間、行政が広く連携し、市外や県外、国外を含めた多くの人やまちとつながりを持ちながら、**未来の文化（価値）を創っていくための取り組みを（仮称）秋田市文化創造交流館（旧秋田県立美術館）を拠点に進めます。**

■芸術祭から文化創造プロジェクトへ

秋田市では、学識経験者や各地の芸術祭で総合ディレクターなどを務めた専門家、アーティスト、市民との意見交換をしながら、秋田市における芸術祭の開催について、方向性やあり方の検討を進めてきました。

全国各地で開催されている芸術祭は、地域に多くのアーティストを招き、作品展示を主な内容としたものとなっていますが、その開催には多くの費用と労力（アーティストや運営スタッフ等）などが必要であり、加えて、アート（アーティスト）とまちづくりの関係性といった課題もあります。

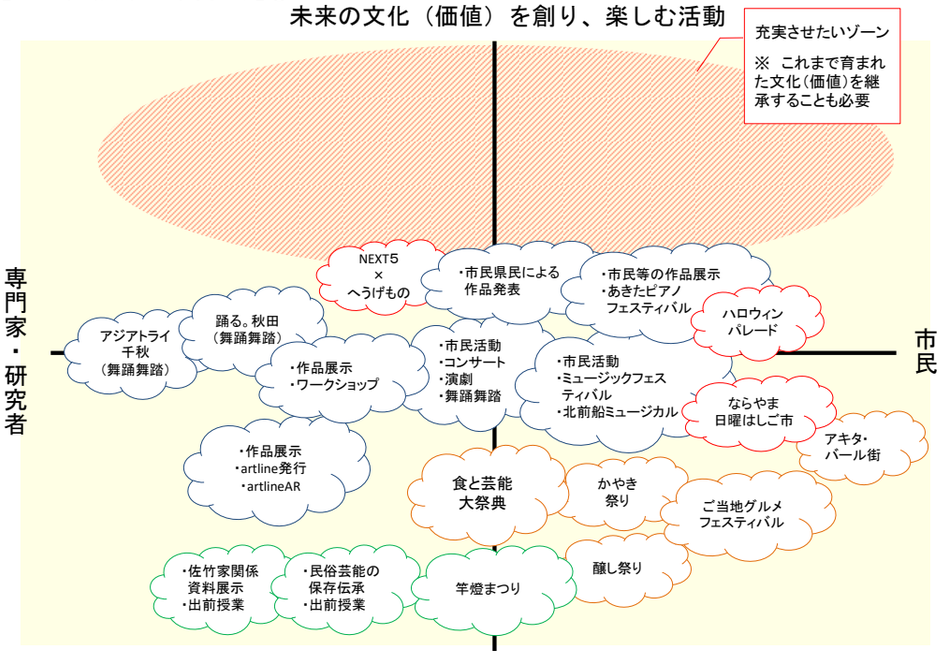
このため、芸術祭を開催してきた自治体等の中には、交流人口の拡大や集客を主な目的とした芸術祭から、関係人口の拡大や人やまちの創造力を高めることなどを目的としたアートプロジェクトにシフトする動きが出始めています。

専門家等からの意見や他都市における芸術祭、さらには芸術祭の次の動きを考える議論などを踏まえ、秋田市における芸術祭は、「人やまちの創造力が高まり、未来に向けた多彩なプロジェクトが展開されてきた際に、未来の文化（価値）を創り、楽しむ活動が可視化されていくこと」であるべきと考えました。

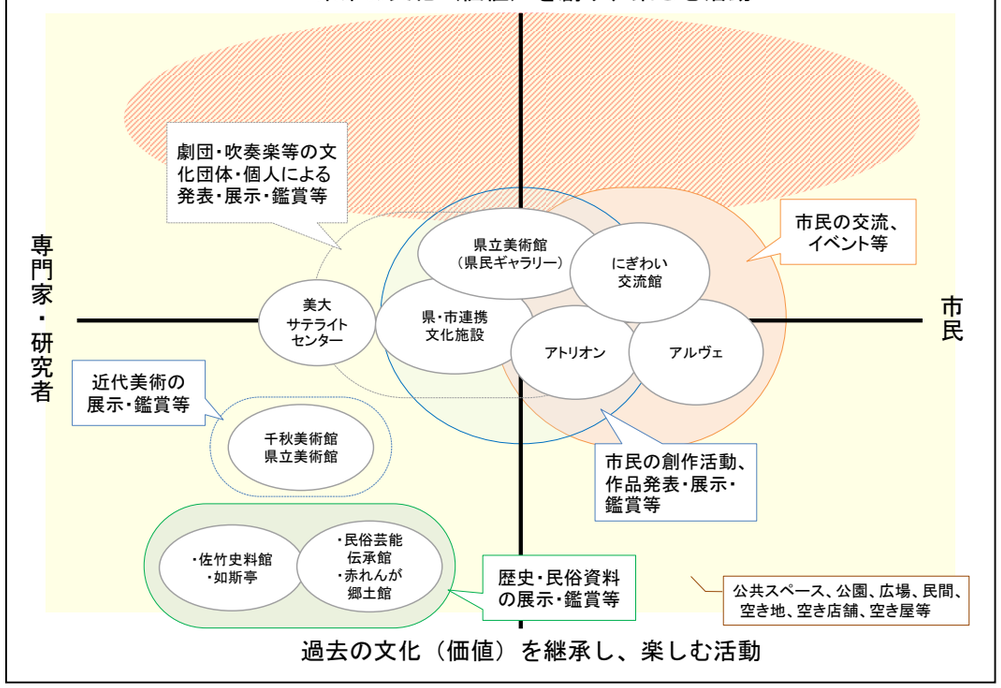
また、この検討の中で、秋田市では、これまでの取組を土台としつつ、未来に向けて新しい価値を生み出していくための創造的な取組を進めるという方向性を見出し、これを今後の芸術文化によるまちづくりの方針「アーツ秋田構想」として掲げることとしました。

従って、秋田市では、芸術祭の開催を目指すのではなく、アーツ秋田構想に基づき、市民協働によるまちづくりが日常的に行われる〝文化創造のまちの実現〟を目指した継続的な「文化創造プロジェクト」に取り組むこととします。

【主な活動（中心市街地）】①



【主な場所（中心市街地）】②



担当者コラム

アーツ秋田構想

20年ちょっと前、私が学生だった頃、秋田駅前には、駐輪スペースではないところ、ちょっとした隙間にも若者たちの自転車が所狭しと置かれ、みんなで本屋やゲーセンに行ったり、イトーヨーカドーの地下で昼飯を食べたりしていました。

今振り返ってみると、何となくまちなかに若者や子ども達がいて、活気があったように思います。それが今日、若者や子ども達の姿が減り、まちのにぎわいが徐々に失われてきていると感じます。国全体で人口減少や少子高齢化が進行していく中で、これまでの制度、行政のあり方はもちろんですが、市民一人ひとりの考え方、価値観、ライフスタイル、ワークスタイルでは、社会の大きなうねりがもたらす課題に対応できず、まちが衰退してきているのではないでしょうか？

そんな時代だからこそ、今を形づくってきた〝人やまちの記憶・歴史〟や〝ありのままの現在〟を見つめ直すことは大切で、これからの生き方を考えるために学ぶことは不可欠なものとなっています。ただ、それをそのまま受け継いでいくだけでは、極端な話しですが、人やまちの進化が〝今〟で止まり、大きなうねりに飲み込まれ、消費されるだけの存在になってしまいます。

〝今〟を形づくるものを見つめ直し、掘り下げ、〝今〟に疑問を感じ、抗う。それを活動や態度に表し、多くの人やまちと共有し、ともに未来に向けて進化を続け、消費されるだけの存在から脱却しなければならないと思っています。そのためには、互いの違いや、挑戦すること、失敗することを認め合う、そういう寛容さを私たち一人ひとりだけでなく、まちそのものが持つ必要があります。

アーツ秋田構想は、そうした未来に向けて変化していくための仕組みづくりをするもので、その具体的なプロジェクトが今まさに始まろうとしています。ただ、何ごとも〝やるからには楽しむ！〟で、未来を創ることを意識する、関わることを楽しむ、そのための妄想をしながら、未来に向けてみんなで歩みを進めたいと思っています。一緒に〝私たちの未来を創って〟みませんか？

秋田市では、〝芸術・文化によるまちおこし〟を掲げていますが、これは、過去につくられた〝芸術文化を生かす〟だけではなく、人やまちが〝未来に向けて自ら底力を蓄え、養い、未来に生き残る〟ための取り組みです。その意識や行動が文化そのものであり、その積み重ねが未来の文化となっていくものと考えています。



『踊る。秋田2017』野外公演 県内ストリートダンスの競演／出演者：秋田大学医学部ダンスサークル Dooties（写真提供『踊る。秋田』）



「まちの部活」のサイクリング部が巡った新屋のまち。
写真の建物は参画屋

「まちなかがっこう」開校！

「部活」というと、学生時代に自分の興味や関心から参加した、学校の部活を思い出す人も多いのではないでしょうか。自分と同じような興味・関心を持つ人たちが集まって、いろんな人たちと友達になることができた思い出があります。

そして部活には「部室」があって、みんなの〝たまり場〟になったり、いろんなことを〝企てる場〟になったりして、とても居心地が良かったことを思い出します。部活は授業とは違う、学びの場でもあったのです。

こんな部活がまちなかにもあったら、いろんな興味関心や活動を見ることができるし、もっといろんな人と出会い、まちを楽しめるんじゃないかということで、昨年度（平成29年度）、〝まちの部活〟をやろう！と「〝部活をつくる〟説明会&ワークショップ」を開催しました。（ドキュメント「アーツ秋田構想」2016～2017、102ページ参照）。そして今年度は、まちを学校に見立て、まだ授業はないけど部活はある「まちなかがっこう」をスタートさせました。

秋田の「まちに関わる、まちを楽しむ」をコンセプトに、「アーツ秋田構想」の取り組みの一つとして、未来のまちにつながる一人ひとりの活動を見えるようにすることで、何かが変わり始めるかもしれませんね。

学校にも、会社にもない、夢中になれる場

まちなかがっこう

部室がみつかるかも!

共同部室※をつかえるよ!

いろんな人と出会える!

部活の情報発信をお手伝い!

まだ授業はないけど部活はある！

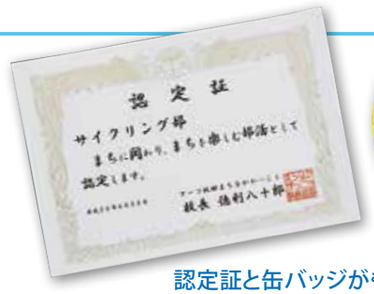
イロドリデザイン編集部
きっかけ部
AKITA ippin発酵部
ノルディックウォーキング部
ハ〇部（はまるぶ）
秋田芸術新聞編集部
ブローチ部
あきたまちのキオクラボ
絵本部
まちなかミュージック部
さすてなぶる部
音楽鑑賞部
おもしぇど・かだればぁ
あきた年の差フレンズ部
サイクリング部

部活募集！

「まちの部活」は“生徒会事務局（秋田市企画調整課）”への登録申請をしていただき、認定をしています。部活の認定のための要件や手続きなど、詳しくは 生徒会事務局まで（52ページ参照）お問合せください。

【認定要件】

❶ まちを楽しみたい、まちに関わりたいという想いがあること
❷ まちに開かれた部活であり、秋田市内で活動が見えること
❸ 部員数が3人以上であること
❹ 宗教活動、政治活動または選挙活動を目的とした活動でないこと
❺ 公益を害するおそれのある活動でないこと





認定証と缶バッジがもらえます!

※ 共同部室
フォンテAKITA6階情報発信コーナーにあります。黒板などの共通備品があり、活動のPR拠点として活用できます

まちの部活を紹介

「まちの部活」は〝生徒会事務局（秋田市企画調整課）〟への登録申請をしていただき、認定をしています。どんな「まちの部活」があるのかご紹介します。（2019年3月時点）

サイクリング部

私たちサイクリング部はクルマ社会の秋田で、移動手段としてあえて自転車を使用します。秋田駅周辺を起点として、秋田市内各所の面白そうな場所やイベントを訪ね歩きます。

訪れる場所は、文化施設、旧所名跡、公園、祭りなど、部員が興味をもっているところはどこでも。昼食は屋外でランチか、現地の店で取ります。目的地周辺に立ち寄り湯や温泉があればそこで汗を流すのも楽しそう。


秋田駅前から新屋に向けて出発　2018.9.23


新屋の町屋の前を走る　2018.9.23


新屋の旧家土間で販売中の中古レコードを物色　2018.9.23


土崎のお寺が続く小路を歩く　2018.11.17


第2回の活動となった土崎の北前船史跡めぐり　2018.11.17

［部長］春日部　［部員数］5名
［メール］zan54533@nifty.com

おもしぇど・かだればぁ

いわゆる「セカンドライフ」を迎えた方々が、外出する機会を持ったり、いろいろな人と交流したり、これまでの知識や経験などを活かした活動の場や趣味を見つけたりすることを目的に、イベントや講座等を企画します。

私たちの活動の一つである「おとなの遊び場計画」は、男性向けのアンケートや聞き取りをした情報を基にして、主に退職後の男性が興味のありそうな企画を考え、男性が参加しやすいイベントや講座を実施しています。


カレー作りに挑戦。徐々に包丁さばきにも慣れてきた 2018.8.25


中央図書館明徳館で開催された「一箱古本市」に参加　2018.10.13


「千秋公園ウォーキング」ガイドさんが先導してくれた 2018.11.3


「スマホの学校 ～初級編～」　2018.7.4


遊学舎の食工房で開催した「第2回 蕎麦打ち体験」 2018.12.9

［部長］菅原　［部員数］12名
［メール］omo.kada.let@gmail.com

ブローチ部

ブローチを集めている人、ブローチを作る人、ブローチを可愛くつけたい人、そんなブローチ好きによるブローチ部です。

自分の好きなブローチづくりをしましょう。ブローチ作りが得意な部員がアドバイスするので、はじめてでも大丈夫です。自分のペースでゆるゆると活動しましょう。

作るだけでなく、慣れてきたら先輩と一緒に販売会にも参加できます。

お子さんも一緒に部活を楽しみましょう。



アイデアを出し合うデザイン会議は真剣そのもの　2018.10.24



共同部室があるフォンテAKITA6階を活動拠点にしている　2018.11.21



さまざまなイベントに積極的に参加している　2018.12.23



羊毛フェルトの小さなブローチ　2018.11.21



「市民活動フェスタ2019」に参加して交流を深める　2019.3.3

［部長］小嶋　［部員数］9名
［メール］toratorino.mori@gmail.com

あきた年の差フレンズ部

「できるだけ長く、楽しく、住みなれたまちと家で暮らすためにはどうすればいいのだろう」……。そんなテーマを市民が集まって探求する中で生まれたのが、この「あきた年の差フレンズ部」です。

人生の先輩と後輩が友達になることによって、どちらにとっても今までとはひとあじ違った世界が広がります。助け合ったり、教え合ったり、話し合ったり、年齢差があるからこそできる交流や学びは、新たな気付きや楽しみを与え、いきいきとした暮らしや柔らかな気持ちをもたらしてくれています。



おそろいの手ぬぐいをかけて参加した「竿燈市民パレード」 2018.8.6



上映会の準備。缶バッジづくりは意外に楽しい　2018.9.1



2か所で上映会を行った映画「ふるさとがえり」　2018.9.9



秋田市雄和の里の家で行った「きりたんぽづくり」　2018.11.11



自分でつくったきりたんぽを試食　2018.11.11

［部長］加賀　［部員数］37名
［メール］akita.toshinosa@gmail.com

ノルディック ウォーキング部

ノルディックウォーキングとは、スキーストックのようなポールを手にして歩くスポーツです。

健康のために何か運動したいと思っている方は沢山いると思います。何をしたらいいか？ 機会がない、忙しい、面倒だ……。理由はさまざまあると思います。そんな方こそ、私たちと一緒にノルディックウォーキングを始めてみませんか？

普段、車で移動する事が多い私たちですが、秋田のまちを実際に歩く事で新しい発見があると思います。



坂道も両手にポールを持つとスイスイ歩ける　2018.11.18



クールダウンのストレッチ　2018.11.18



体験したい人には予備のポールを貸しだします　2018.12.24



八橋コスモスロードの桜並木。春が待ち遠しい　2018.12.24



歩く前の入念な準備運動　2019.1.13

［部長］遠藤 ［部員数］5名
［メール］emicoemir_s@yahoo.co.jp

絵本部

絵本や児童文学について大人が楽しくまったりと語り合う部活です。

お気に入りの作品の紹介もよし、誰かのお勧めに耳を傾けるもよし、作品について熱くマニアックに語り合うのもOK。

子ども時代に好きだった絵本、大人になってから好きになった絵本、自分の子どもが好きな絵本、読み語りにお勧めの本、などなどゆるーく語り合いましょう。



絵本について語ると話はつきない　2018.10.20



部員人数も増えて、イベント参加の打ち合わせ　2019.2.16



「まちなかがっこぅ」共同部室でイベントの準備中　2019.3.2



絵本の読み聞かせ　2019.3.2



「市民活動フェスタ2019」は大盛況　2019.3.3

［部長］沓澤 ［部員数］9名
［メール］ehonbu@hositan.com

新たに生まれ変わろうとしている旧県立美術館に親しんでもらうイベントなどを企画する部活です。2018年はたくさんの人の「旧県立美術館への思い出」をカタチにする企画を行ないました。

旧県立美術館を知って、親しんで、関わってくれる部員を募集中です！　一緒に楽しいイベント・たくさんの人を巻き込むイベントを考えませんか？　お気軽にご連絡ください。

［部長］佐藤　［部員数］10名
［メール］ro-plmn@city.akita.lg.jp

八〇部（はまるぶ）



旧県立美術館前で打ち合わせ　2018.7.22

あきたまちのキオクラボ



昭和の写真を展示し、多くの方からまちの記憶を引き出した　2018.10.6

皆さんは、秋田のまちが好きですか？

私たちは、まちあるきを主として、まちの記憶や物語を巡ったり、掘り起こしたり、語ったり、懐かしんだりします。また、新たなまちの使い方やデザインを考えたり実際にやってみたりもします。

昔から変わらない好きな場所、新しく見つけた居心地の良い場所。お堀の跡や、新しい建物。世代を問わずにみんなでまちの記憶を共有して行きたいな。昔のまちと今のまち、そしてこれからのまち。老若男女、学生、社会人を問わず。さあ、共に語ってつむいで行こう、秋田今昔物語を。

［部長］タグチ　モトカ　［部員数］10名
［メール］kamada@akita-nct.ac.jp

さすてなぶる部

サステナブル（sustainable）とは持続可能である様、特に環境を破壊せずに維持継続できるという意味です。

建物や造作物はもちろん、文化・産業・技術・知識など、有形無形問わず、未来の子孫の利益を損なわないため、継承すべきもの、進化発展させるべきものなどについて考え、議論し、情報や志や思想などを共有、挑戦することが目的です。

当面の計画は、①共感共鳴できる部員を増やす、②メンバー同士が気軽にOUTPUTしあえる、安定継続的なコミュニティ機会を創出することです。

［部長］工藤　［部員数］3名
［メール］jigeko@me.com

毎回テーマを決めて、互いにおすすめの曲の良さなどを紹介し合います。自分の好みが限定されがちな大人に、他の音楽のジャンルのとびらを拡げてもらいたいと考えています。

各自に音源やレコードジャケット等を用意していただきますが、時にはピアノ演奏など生演奏も楽しんでいきます。「知的好奇心の花火　輝け！　響け！」

音楽鑑賞部



「市民活動フェスタ2019」で談笑する佐々木部長　2019.3.3

［部長］佐々木　［部員数］8名
［メール］fuga@nifty.com

まちなかミュージック部

天気がいい日にまちなかで、お子様連れのママさん、パパさん、そしておじいちゃんやおばあちゃんなど、いろいろな人たちと音楽を通して交流したいと思っています。

ソウル・ファンク・ジャズのほか、昭和歌謡や演歌、童謡、民謡など、さまざまなジャンルの曲を使ってDJの練習やレコード鑑賞、情報交換をしたり……そして、お祭りや盆踊り、地域のイベントなどのBGMとして部員の選んだ楽曲でDJを行ったりして、来場者や観光客の皆さんをおもてなしするのが目標です！

［部長］一ノ関［部員数］3名　［メール］weonno1@gmail.com

秋田芸術新聞編集部

ニュースサイト「秋田芸術新聞」の編集部です。アートを軸にした秋田市内の出来事を部員が取材し、記事化します。アートイベントや展示会に限らず、カフェやショップなどにもお邪魔して、日常のさまざまな出来事を発信します。

現在、グラフィックデザイナーやライター5名で活動しています。文章を書くのが苦手な人向けに開くライティング講座などと連携しながらサイト開設へ向けて準備を進めています。

［部長］千葉［部員数］5名
［メール］chiba@esner.com

きっかけ部

新しいことを始めるとき、仲間や〝きっかけ〟があれば始めやすい気がしませんか？　私たち「きっかけ部」は、部員の「やりたいこと」をお手伝いしたり、互いの「やりたいこと」を見つけたり、何かを形にするための〝きっかけ〟になる部活です。

・やりたいことはあるけど形にする〝きっかけ〟がない人
・やりたいことを見つけたい人
・得意分野を活かしたい人

大募集です！　この部活を〝きっかけ〟に、自分や仲間の「やりたいこと」を形にしませんか？

［部長］伊藤［部員数］12名
［メール］kikkake.akita@gmail.com

イロドリデザイン編集部

経営者、生産者、都会ではなかなか会うことができない人。でも田舎なら「会いにいける社長」がいます。何かを生み出している「社長」に会いに行ったり、考えを直接聞いたりできたらなんだか面白そう！　なんでこれつくったの？　田舎ならではのビジネス？　イロドリデザイン編集部で面白い社長を取材インタビューします！

（例）「落ちてる葉っぱが商品!?　葉っぱ社長とは」

［部長］キクチ［部員数］5名
［メール］info@irodori.akita-create.com

AKITA ippin 発酵部

秋田の〝食〟をもっと楽しもう！　そして、いろいろな人とつながろう！　という部活です。日本酒や味噌など、秋田の食に欠かせない発酵文化を体感し、食を通じた人と人とのつながりをつくっていきたいと思っています。

酒蔵見学や地域の名店掘り起こし……。自分たちで食のイベントを企画してみたり、食にまつわる活動で一緒に秋田を楽しみましょう。

［部長］永井［部員数］5名
［メール］akita_ippin0220@outlook.com

担当者コラム

「まちの部室」考

部活といえば、部室はつきものです。そこでまちの部活の部室について考えてみました。

「部室」は、部員たちが集まり、活動を企てたり、たまり場にしたり……。同じ興味関心を持つ人たちが集まってワイワイ何かをするだけではなく、新しく入部したい人とか、何となく活動に興味がある人……もしかすると、興味はないものの偶然通りかかったような人にとっても、活動を知ったり、人とつながったりできる開かれた場であれば、そこから新しい活動が生まれたりするんじゃないかなぁと。

「まちの部活」は、自分たちの興味関心をベースにした自由な、強制されない活動であって、活力に満ち、楽しむ気持ちが外に滲み出ていて、多くの人たちを惹きつける魅力を持っていると思うんです。

そういう点では、まちなかをフィールドにした部活動だけではなく、「部室」そのものがまちなかにあって、多くの人たちが目にすることができれば、一緒に楽しみたい人やさらに新しい楽しみを生み出す人を呼ぶ、というように、まちを楽しむことが連鎖していくと思いますし、部活自体がさらにまちを楽しむネタを見つけたり、アイディアが浮かんだりすることにつながるんじゃないかと。

こうして考えてみると、まちの部活は個人やグループが行う趣味活動や市民活動とはちょっとだけ違っていて、特定の人や場所、活動内容に縛られることなく、まちや多くの人たちと関わり、さまざまなコミュニケーションを通じて進化していくもの、そしてそれに伴って人やまちも進化していくという感じですね。

市では、部活サポートのテストケースとして、部活に参加している方は誰でも使うことができる「共同部室」をフォンテ6階情報発信コーナー内に準備してみました。ここは、まちの楽しみ方・遊び方を「企む」場所だと思っています。個々の部活は、それぞれのニーズに応じて、の「部室」をつくっていくと思いますが、最初にどんな部室が誕生するのか、とても楽しみです！

「部室」を考えつつ振り返ってみると、以前の秋田のまちでは、産業会館跡地で行われていたBMX、スケボー、インラインスケートなどのエクストリームスポーツ、そしてアトリオン仲小路側広場でのストリートダンス、ぽぽろーどや大屋根下でのストリートミュージシャンやパフォーマンスなど若者の姿が見られました。今は見られなくなってしまいましたが、若い世代にとっては、まちを楽しむ居場所、みんなに見てもらえる場所であり、興味関心が同じ仲間がいて、約束がなくても集まって、話して、遊びを企んで、という、「部活」であり、「部室」のようなものだったんだなぁと思い出します。


共同部室で楽しそうに活動の相談をしている様子

また、まちなかや身近な公園も、草刈りをしたり、町内会行事があったりしますが、その他のイベントや遊びでの使用は手続きが必要で、気軽に市民が活用できないというイメージを持たれていることもあります。

こんな積み重なりが、まちなかで楽しめる場を減らし、若い世代が市街地に魅力（余白とか）を感じなくなり、結果、市街地の活力が失われていく一因になっているのかも……と感じてしまいます。

まちなかの楽しみ、活動の多様化、市街地の活性化などをまともに考えていくのなら、「部活」がまちなかの活動と人が見える状況をつくり、これまでの管理や排除につながるような意識の垣根を取り払うきっかけになると面白いのですけど。将来は、市民みんなが公共空間の使い方を楽しめるようになれば良いですね。

さまざまな企みの実践の過程で、「まちの部活」が、それぞれ「まちの使い方」として「部室」を見つけていくことが理想なのかな。

部活はじめました。

「部活はじめました。」は、まずは〝まちの部活〟を知ってもらい、いろいろな方とつながる機会をつくるために開催しました。この日のイベントは、部活ディレクター・藤さんと部活の先輩、新潟市の「手部じゅん」さんのトークからスタートしました。（2018・6・30、秋田拠点センターアルヴェにて）




藤浩志さん（左）と手部じゅんさん（右）

藤：秋田市がまちなかや駅前周辺を芸術文化ゾーンとして、芸術文化を活かしたまちづくりを進めていますが、私はそれを手伝っていて、まず始めたのが「まちなかがっこう」まちの部活です。

〝秋田市のこれから〟を考えたとき、住んでいる方たちがいろんな活動をして、いろんな力になっていくということが一番重要だと思っています。

いろんな自治体を見てきましたが、行政はハード優先になりがちか、単にソフトをつくろうとして、フェスティバルや祭りをつくっちゃうんです。私はイベントとかプログラムって、市民がつくるべきだと思っていて、そのプログラムを動かすためのシステムを行政なり公共のところがつくるべきだと強く思っています。

コンピューターにオペレーティングシステム（OS）がありますが、僕は20年以上前から、まちなかにOSのような仕組みをつくっていくことに興味を持っていました。本来、行政が行うはOSづくりなんじゃないかと思っています。

そういう意味で、ボランティアとかサポーターとかではなく、仕事場でも家庭でもなく、自分自身の興味関心を実現していけるような場とか、自分たちが生きていくうえで必要な人とつながったりできる場、というのが果たして、まちなかにあるのだろうかと考えました。いわゆる「部室」みたいなものです。

学校や大きな企業には部室や部活があったりするんですが、まちにはそれがない。使用する時の予約をして、その都度片付けなくてはいけない公民館などと、部室とはやはりちがうんです。公民館とかは、たまり場になりえない。部室のよさというのは、同じ興味関心を持ってる人がそこにいるということですよね。そして道具があって、いろんな材料があって、そこで何かをつくろうとしている人がいる。そういう部活みたいなものが、まちなかに不足しているのではないだろうか。そう思った時に、まちの部室、まちの部活を考えたわけです。

今日は新潟市から部活の先輩ということで、手部じゅんさんに来ていただきました。これから秋田市で「まちなかがっこう」を進めていくうえで、いろいろ参考になる話をしてくれると思います。

手部：新潟市で「手部」の部長をしている手部じゅんです。よろしくお願いします。

「手部」は、2012年の「水と土の芸術祭」で、藤さんの「部室ビルダーかえるぐみ」という作品で誕生した部活で、手を使うこと全てが部活動という集まりです。

私たちは、新潟市中央区にある古町商店街に「フルマチ・アートスタジオ」を開きました。みんなが自由にふらりと立ち寄れる、そんな感じの

部室です。私が部室を開けていると、お客さんがたくさん遊びに来て、部員がどんどん増えていきました。最初は5人で始まり、芸術祭が終わるころには75人になっていました。

フルマチ・アートスタジオでは、年に1回、作家さんを呼ぶレジデンス事業をやっていて、その作品づくりの1か月間以外は手部の部室となっています。1年目の作家さんは茂井健司さんという方で、鏡とガラスを使った作品をつくってワークショップを行いました。

2年目は、秋田公立美術大学教授の岩井成昭さんで、新潟市美術館とアートスタジオをつなげようということで、岩井さんが新潟市美術館で「アナタにツナガル」をやり、同時にアートスタジオでは「ナマエラボ」をやりました。秋田には占い文化が根付いているということを聞いていたので、秋田から千鶴先生という姓名判断の先生に来ていただき、誕生日やタロットなどの占いをやっていただきました。部室の近くには専門学校が3校あり、平日の昼間は学生、土日はちびっ子だったりおじさんだったり、いろんな人がいっぱいきて、楽しく部活をすることができました。

3年目は鈴木泰人さんという方で、アートと演劇をコラボしようと、演劇と舞台をみんなでつくりました。手部が演劇で、アートが鈴木さんです。東京で活躍されている石原武龍先生という脚本家の先生にお願いして「命」について書いてもらい、役者もオーディションで決めるなどしました。部員の中にいろんな技術を持っている人がいるので、既存のスタジオを全部解体して、演劇用の舞台を手づくりしたんです。

このアートスタジオは3年で終わろうと思っていたので、最後にアートスタジオに関わってくれた人たちの作品を展示しようと、まちなかに美術館を手づくりしました。フルマチ・アートスタジオは、新潟市の事業で、取り組みは市や古町商店街などで構成する実行委員会で決めていました。運営は手部が担っていましたが、市や商店街の皆さんがとても協力してくれて、やりたいことは全部自由にやらせていただきました。また、9番町という地区から「ぶらり酒」というイベントの看板をつくってくれとか、空間アートをつくってくれとか外部から依頼があり、10mの巨大塗り絵をするということで、商店街でお客さんみんなと塗り絵をしてつくりました。

藤：フルマチ・アートスタジオはなくなったんだよね。

手部：そうですね。ただ、おじいちゃんやおばあちゃんがいっぱいいる、味のある商店街「フレッシュ本町」で活動を継続してます。アーツカウンシル新潟のディレクターさんが、ガレージを貸してくれて、そこを部室「八十八本町」にしてます。

藤：新潟の水と土の芸術祭は、100団体ぐらいが参加してやっています。新潟は区がいくつかあって、その全域にそれぞれの市民プロジェクトがいっぱいあるんだけど、どれを見ていいのかわからないため、その拠点施設をつくろうということで、手を挙げてもらい、手部さんの「八十八本町」が中央区の拠点になったんですよね。

手部：そうですね。最初はどうなるんだろうって思ってたけど、やってよかった。

藤：僕も部員になったんだっけ？

手部：そうですよ。遅かったですけど。

藤：平成30年7月から10月まで新潟市で開催される「水と土の芸術祭」に参加するんだよね？

手部：そうなんです。市民プロジェクトの一つとして「妖怪祭り2018 in 新潟島」というのを企画して、今、その準備を進めています。7月14日（土）から10月8日（月・祝）まで「フレッシュ本町」にあるアトリエで公開制作をして、9月8日（土）にはイベント・妖怪祭りを「りゅーとぴあ新潟」でやりますのでぜひ見に来てください！

藤：楽しんでますね。では、秋田にはどんな部活が誕生したんでしょうか。



〈プロフィール〉
表現者アート集団「手部」部長
手部じゅんさん
（アートとコミュニティのコーディネーター）

2013年　こども創造センターでワークショップの開催を中心に活動。
2014年　にいがた妖怪祭りをにいがた映画塾と新潟妖怪研究所と共催。10月から、「フルマチ・アートスタジオ」アートコミュニティ事業の企画運営。商店街と連携し、さまざまなイベントを展開（～2017.3）。「水と土の芸術祭」市民プロジェクトへの参加。
2015年　手部のガタガタ移動部活プロジェクト2015（手部）
2018年　妖怪祭り2018 in 新潟島（手部と妖怪祭り実行委員会）

「まちの部活」が活動紹介、部員募集！

各部活の部長が活動を紹介しました。

■サイクリング部



部活の夢を説明する「サイクリング部」部長の春日部さん

春日部：サイクリング部の春日部です。今年2月に秋田市で、「部活をつくろう」というイベントがあり、それに参加して、私ともう一人の人と一緒にプレゼンしました。私は旧所名跡が好きで、秋田市を回りたいというのがあり、もう一人の方が秋田市内でサイクリング遊びをしたいというので、合わせてサイクリング部にしました。

藤：自転車でどこを回るの？

春日部：秋田駅周辺を基点として市内各所に出かけます。今行ってみたいところが新屋と金足で、面白そうなスポットは新屋表町通りですね。古い建物があって情緒がある。新屋ガラス工房や日吉神社のお祭りも面白そうです。サイクリングで汗をかくので、温泉もあってちょうどいいかなあと。

そして金足です。県立博物館、小泉潟公園、旧奈良邸、黒川の旧三浦邸など。秋田駅からだと14キロあるのでちょっと大変ですが、土崎駅からだと7キロです。県立博物館のワークショップとかに一人で行くより、みんなで行くと楽しいのではないかと思っています。

藤：いいですねぇ。うちの大学の教員で、秋田駅周辺から大学まで自転車で通っている人が多いです。新屋ですと、海岸や大森山動物園にも自転車で行けます。楽しんでください。

■イロドリデザイン編集部

キクチ：部長のキクチです、よろしくお願いします。私たちの部活は、実際に会いに行ける社長に面白インタビューする部活です。東京のような都会では社長になかなか会うことができませんが、秋田だったら会いに行けそうな社長がいます。何かを生み出している社長の考えを身近で聞くことができるのってなんだか面白そうだなぁと思ってつくりました。「どうしてこれをつくったの？」「田舎ならではのビジネス？」そのようなことを取材インタビューします。募集部員はネタ班、取材班、デザイン班で、配信媒体はネットです。

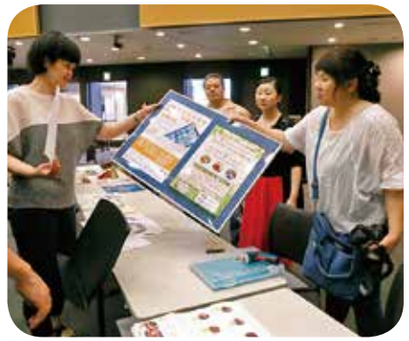
藤：それぞれの班はどんな感じのことをするの？

キクチ：ネタ班はどこかに出かけた時に面白いものやサービスがないかネタを探します。取材班はネタ班から得た情報で、そのサービスをつくった人はどんな人物なのか、バラエティのノリで取材に行きます。デザイン班は取材班から得た情報を、とにかくかっこよくおしゃれなデザインの記事にして配信します。イメージはテレビの「情熱大陸」風です。部活全体では、社会人の青春な放課後を目指します。

藤：取材する社長さんのイメージは？

キクチ：参考にするのは徳島県上勝町の「葉っぱビジネスで稼ぐおばあちゃん」です。葉っぱビジネスとは、山にある0円の葉っぱが2億6千万円の売上になったというもので、こういう面白いビジネスを考えた人って、いったい誰なのか。一人のおばあちゃんの葉っぱを活用できないかという仰天アイデアから始まったんですが、面白いサービスやヒット商品を生み出した陰には、面白いアイデアを持った人が必ずいると思うので、そこを取材してみませんか。幽霊部員でも大丈夫です。

藤：編集することってすごい求められていて、ちゃんと取材して、編集して、テキスト化して、それを媒体に載せていくっていう活動をしないと埋もれていき、見えてきませんね。新潟の市民プロジェクトでもいろいろ行われているんだけど、それをちゃんと記録に残しましょうとしたんですが、なかなかできない。これはすごく重要なことです。


ブース準備中の「おもしぇど・かだればぁ」の部員たち

菅原：はじめまして、よろしくお願いします。私たちは、秋田の楽しい暮らしを企画する部活です。秋田弁で「面白いよ。仲間に入ろう」という意味で、通称「おも・かだ」です。昨年度、秋田市の講座で高齢者のセカンドライフについて検討したところ、退職後の男性の楽しみをつくる場が必要なのではないかという話で盛り上がったのがきっかけで活動を始めました。

今年は、退職後の男性向けの、「おとなの遊び場計画」と題した企画を秋田市内のさまざまな場所で開催します。地域の方が参加できるようにしたり、参加者のスキルを活かして参加者が講師となることもできます。参加している中で、「これを極めたい」という趣味を見つけたら、卒業もOK！

藤：なぜ男性だけが対象なの？

菅原：男性の多くは、現役時代は仕事に追われ、趣味ややりがいを持たないまま退職し、また近所づきあいは妻の役目としてきたため、人との関わりが苦手な人も多いようです。男性はコミュニケーションが苦手だったり、外に出るのが億劫と感じているのが現状なので、男性に特化した活動を考えました。

藤：具体的にはどんな活動をしてきたんですか？

菅原：最初は「そば打ち講座」でした。退職後の男性を募集しましたが、10代からも応募があり、70代の男性が10代の男性に教えたりと世代間交流があり、盛り上がりが見られました。第2回は「スマホの学校」を企画中です。



部活で新たな友人をつくることで、心や体の健康づくりをし、家庭で会話が増えたり、妻も心配や負担が減るなど、家庭環境も良好になれば素晴らしいと思っています。今後は料理教室やウォーキング講座、おもかだハンサム男子交流会、おもかだ男's（メンズ）キッチンも企画しています。

■音楽鑑賞部


民俗楽器を使って部活説明をする「音楽鑑賞部」の佐々木部長

佐々木：音楽鑑賞部の佐々木です。私は6年前に秋田に戻ってきまして、眠っているCDやレコードをもう一度耳を澄まして聞いてみようとか、友達とここが好きなんだよね、と語り合ってみようとか、そういう気軽な大人の学びが欲しいと思っていましたが、「まちなかがっこう」の企画を見て、これだ！と思って応募しました。今日は、民俗楽器を持ってきてますので、ちょっと聞いてみてください。

藤：音楽っていいですよね。どんな感じの活動なの？

佐々木：秋田は、白鳥が北に帰るときに鳴く声とか、耳を澄ませば、強い風や逆にそよかぜなど、本当に自然のサウンドに恵まれている、豊かな音に包まれている土地柄だと思います。秋田で、未知の音楽などを鑑賞することで、新しい世界が開ける豊かな文化生活、上質な田舎っていう言葉がぴったりのスローライフな生活が送れそうなんじゃないかなと考えました。音楽を聞くだけの部員も募集していますので、お気軽にご参加ください。市役所の音楽室やAUで活動しています。よろしくお願いします。

藤：新屋の「わたこう」さん。そこで、レコードを聞いたりできます。すごくいいアンプとスピーカーセットを置いていて、すごくいい時間を過ごせますね。

■あきた年の差フレンズ部


パンフレットを見せ活動を紹介する「あきた年の差フレンズ部」の部長

加賀：よろしくお願いします、部長の加賀と申します。この部活は、秋田市が高齢者の社会参加や地域貢献を促進することを目的に、2015年度から3年間取り組んできた事業をきっかけに立ち上げた部活で、20代から80代までの幅広い年代が参加して、「ゆるく、無理せず、でもほっとかない」をモットーに活動しています。

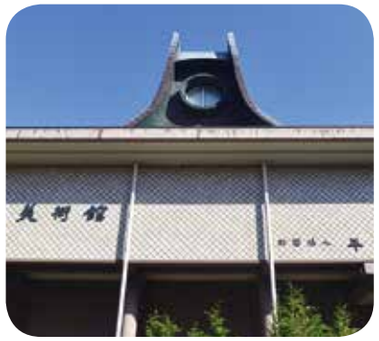
「竿燈市民パレード」に参加したり、「年の差バーベキュー」を開催した際、本の朗読が上手な先輩が子どもや参加者を集めて即興で朗読会を行うなど、さまざまな得意技を持った先輩たちが活躍する場にもなっています。


竿燈まつりの際に、秋田市民パレードで行進する「あきた年の差フレンズ部」の部員たち

活動に正解はなく、参加メンバーの自由な発想をもとに、考えたり、チャレンジしてみることが大事だと考えています。来る人はこばみません。去る人は、ちょっとだけ追わせていただきます……。

藤：「おも・かだ」もそうだけど、この先の活動がどうなっていくのか楽しみですね。

■ハ〇部（はまるぶ）


「ハ〇部」の部名の由来となった旧県美

佐藤：旧県立美術館に親しもう、「はまろう」ということと、建物の屋根と丸窓の形からハ〇部という名前にしました。旧県立美術館が閉館してから5年ほど経ち、この特徴的な建物が、まちに関わるみんなのための場として生まれ変わろうとしています。

そこでは、市民が活用したり、作家の活動を近くで見たり、作家やゲストと市民がつながったりできる場所になるはずなので、今からみんなで旧県立美術館に、まちに関わっていこう！という部活です。

藤：どんな活動をするの？

佐藤：旧県立美術館の今後の活用に関わりたいなぁと思っている人たちを集めて、小さくていいので何かイベントとかやりたいなぁと思っています。活動内容は固まってないので、参加する皆さんと一緒に考えて、みんなで育てて大きくしていきたいですね。

藤：ハ〇部すごいですね。どういう活動が出てくるかわからない。仕事上やむを得ずっていう感も見え隠れしますね（笑）

手部：楽しみですね。場所は千秋公園の入り口ということですが、集まりやすいですね。みんなでつながると面白そう。

部活の先輩「手部」さんからのメッセージ

藤：秋田の部活の皆さんにアドバイスをするとしたらどんなこと？

手部：そうですね……。皆さんも部活を始めたり、始めたいなぁと考えていると思うんですけど、これをやれば成功するというのはないんです。

とにかく、"やってる人が一番楽しむことが大事"だと思っています。そうすると自然にいい仲間ができ、純粋にその活動に向き合うことができ、部活を続けていけると思います。私が手部をやっていて一番うれしいことは、お客さんや部員が喜んでる顔が見られることですね。一番の宝は部員とたくさんの仲間が出来たことです。6年前の私からは想像できないほどの人生の転機で、藤さんに出会って、芸術祭やアートスタジオに関わって、私のように人生が変わった人が何人もいます。

皆さんにも、こんな体験をしてほしいなと思っています。

まちなかって、もっと楽しくなる！

今年の「まちなかがっこう」イベント第2弾は、〝あったらいいな、こんな部活〟と題して、新しいまちの部活をイメージしたり、各部活の体験入部を行ったりしました。（2018・10・6、なかいち広場にて）



（上）気に入った部活ブースに体験入部
（下）〝あったらいいな　こんな部活！〟をテーマにしたトークショー



◇あったらいいな、こんな部活

〝まちを楽しむ〟ことを妄想するのはとても楽しいですよね。

まずは、「まちにこんな活動があったらいいな」、「もっとまちを楽しむ」ということで行われた秋田公立美術大学副学長の藤浩志さん、秋田工業高等専門学校助教の鎌田光明さん、「あきたまちのキオクラボ」の部長タグチモトカさん、そして秋田市企画財政部企画調整課の齋藤課長による妄想トークショーをご紹介します。

齋藤：「まちなかをもっと楽しむ」「まちの楽しみ方」「まちの使い方」ということについて話をしたいと思います。よろしくお願いします。

藤：青森県十和田市にいるときに、秋田に美大ができてうらやましくて、いてもたってもいられなくて、青森を裏切り……（笑）。秋田に来て4年になります。よろしくお願いします。

鎌田：私は建築とか都市とか空間の研究をやっていて、今は秋田市の空間に絞って研究を続け、千秋公園のお堀をどうしようかとか、仲小路をどうしようかというようなことを考える活動をしています。よろしくお願いします。

タグチ：昔の写真から、昔と今の秋田の風景ってどんなところが違うのかという研究をしています。よろしくお願いします。

鎌田：タグチさんの研究プログラム、「あきた今昔物語」って僕ら呼んでいるんですけど、「ALWAYS三丁目の夕日」を見ますと、昔の風景なのになんか懐かしく感じたりするんですね。僕らなんて産まれていないはずなのに、秋田の昔のまちの写真を見た時に、なんかいいなって思ったりして。我々の中に根づく昭和ノスタルジーみたいなところがあるんじゃないかという壮大なテーマの研究をやっています。

藤：僕らは両親の遺伝子を受け継いでいるけど、この遺伝子には、僕が生まれるまでに両親が経験したことが記憶されていて、それが僕に引き継がれています。それはすごく重要だと思っています。

僕は1世代33年説をとっていて、2世代で66年、3世代で99年となります。僕の父親が大正の生まれで、じいさんは明治の生まれで、そのじいさんのさらに父親は江戸時代の天保年間の生まれです。僕が生まれたころは、天保の人がまだいたんですね。それを考えると、人間は百年ぐらいだいたい生きるわけだから、先祖、子孫合わせると、5世代、6世代と関わっている気がするんです。

そのことを考えると、遺伝子が持つ記憶というのは、すごく重要で、学生に常に話しているのは、自分たちの活動が10年後、20年度のまちの風景として立ち現れてくるよと。

齋藤：タグチさんが関心を持った写真が昭和37年前後のものだったんですが、自分が生まれる直前のその写真に妙に懐かしさを感じるのは、遺伝子がやっぱりあるのかもしれません。

タグチ：私も昭和の写真とか見ても、どこの場所かわからないけど、なんか懐かしいなぁと感じたりします。

鎌田：藤先生は、世代のつながりみたいなことをお話ししていましたが、そういう世代のつながりとか、僕らが知らなかった都市の記憶みたいなのを伝えてもらえたりするのは、すごく有意義ですね。

藤：東日本大震災後、女川でリサーチしていた時に、「音の記憶」と「匂いの記憶」の話が出てくるんですね。海辺の生活感、特に漁港の路地を歩く時の音と匂い、それがなくなってしまったことがすごく問題になっていて。匂いの記憶ってすごく残るらしいんですよね。写真の延長で、匂いとか音であるとか、そういうもの探っていくというのは、すごく重要な気がしますね。

僕が関わっている青森県八戸市には横丁を使ったイベント「酔っ払いに愛を」というプログラムがありますが、こういう企画でまちなかをどうやって楽しむか、まちなかで使われていない場所に人が入り込んでいくようなプログラムがあるといいですね。

齋藤：そういうのが秋田にあるといいですよね。

鎌田：八戸は用意されたイベントではなくて、自分の意志でやっている感じがすごいですよね。



藤浩志さんは「隙間部」などの妄想部活を楽しく語った

体験入部
（会場を訪れた方がまちの部活に体験入部）

絵本部

部員が好きな絵本を20数冊持ち寄り、絵本について語り合ったり、読み聞かせを行ったりしました。むかし読んだ絵本を見つけ、懐かしいと喜んでくださった参加者がいて、とてもうれしかったです。



「絵本部」のブースには、子どもが集まってきた

ハ〇部（はまるぶ）

「旧県立美術館の記憶と未来」をテーマに、会場を訪れた皆さんから旧県立美術館への思いを書いてもらいました。予想以上にたくさんの思いが集まり、旧県立美術館が市民・県民に親しまれていたことを改めて感じました。



「ハ〇部」のブースでは旧県美の思い出を、参加者から雲形のモクモク・カードに自由に書いてもらった

藤：自分たちでつくっていくという感じがありますよね。八戸に新しい施設「八戸まちなか広場　マチニワ」がつくられました。「八戸 ポータルミュージアム・はっち」の向かい側の古いビルを取り壊して、奥に八戸市が「八戸ブックセンター」という本屋さんをつくったんです。そのブックセンターと「はっち」の間の土地を全部「マチニワ」という広場にしようと、立派過ぎる感じの建物を建築しました。

　見ていると小・中・高校生がwifiをつないでゲームしていて、ゲーム場が出来たみたい。その他、高齢者とかが座っているんですけど、かなり重要な場所ですね。秋田にも大屋根がいっぱいあるので、使い方によっては同じような感じになるのかな。wifi、椅子、テーブルとかはないけど。

鎌田：私たちはまちの隙間を使っていきたいと思っていて、例えばビルとビルの間だったり、小さな広場だったりとかで、秋田市にもそういうところが結構あるんですね。でも、それがうまく使われていない、活用されていない。自分たちで楽しむ場のようなものをつくっていきたいと思ってます。

藤：バブル期の福岡で、IMS（イムズ）というビルができた時に、そこで、「九州コンテンポラリーアートの冒険」という企画を10年間ぐらいやりました。普通の商業ビル内のエレベーターやエスカレーターの横とかの隙間を使って、若手作家の企画公募展をやったんです。

　公募展なので、若い作家から毎年200点ぐらい応募があって、その中から10何点が選んで実際に展示するんです。そのなかで一番いい作家が次の年に、新聞社が持っているギャラリーで展覧会ができるっていうおまけ付きで。結果として、そこからいっぱい作家が育っているんですよ。

齋藤：鎌田さんやタグチさん、使いたい隙間ってあるんですか？　まちを歩いていて。

タグチ：アトリオン周辺とか、広小路や仲小路の建物と建物の間になにかあったら面白そうだなぁと思った時はあります。あとは人が通れる路地とかに面白いお店があったりすると、もっと行きたくなる気がしますね。


「あきたまちのキオクラボ」部長のタグチモトカさん

鎌田：実は仲小路のアトリオンの隙間だとか、ビルとビルの間だとか、そこを活用していこうというプロジェクトを進めています。例えば東京の銀座はビルが画一的に並んでいるんですけど、実はビルとビルの間に路地がたくさんめぐらせられていて、路地からしか入れない小料理屋みたいなのもあったりして、すごく冒険心をくすぐられるし、歩いていても楽しいんですね。そういう歩いて楽しいまちみたいなところをしつらえてあげるというのが大事だと思っています。空間として面白いまちなみをつくってあげると、楽しみながら川反まで行けるまちができてくるんじゃないかな。

藤：「隙間部」ですね。

齋藤：「隙間部」ってあったら面白いですね。小学生の時は今より世の中が厳しくなかったので、学校の行き帰りに他人の家の隙間が近道だから通ったりしましたね。子どもだから許されるけど、この時代、この年代で同じことやったら犯罪者になっちゃうんでできないんですけど（笑）。そういう隙間の活かし方の部活ができると面白いなって、思わず妄想しちゃいますね。

藤：90年代だったと思うんですけど、福岡や広島の辺りで、雑草が凄くフューチャーされた時期がありました。屋根の上に草が生えてたり、そこに自分の好みの植物を密かに植えていき、それが育っていくのを楽しむとか。

　いろんなまちにいろんなものを仕掛けて自分の空間をつくっていく活動をしている友人の建築家が、植物植えていく延長で、福岡でやってる〝花いっぱい運動〟のプランターに勝手に芋を植えていき、友達と収穫祭をやったり、収穫した芋を食べたりとかしてました。結構まちって遊べるなっていう植物系の例ですね。

齋藤：祭りは観光客のためにやるんじゃなくて、地域のしきたりとか、村を守る奉納のために地域の素材を活かしてやっていたっていうのが本来の姿だと思うんです。住んでいるまちや土地の何かが活かされて今のまちが出来て、それを活かすとどういう人が集まってきて面白くなるかを知ることで、次の楽しさが考えられるのかなと思います。

鎌田：祭りとしてのエンターテイメントと、ずっと守ってきた神事としての伝統みたいなところで揺れている祭りがあって、地域の伝統や産業みたいなことからやっているところもあれば、パッケージ化されてる所もありますよね。作り手も1人しか残っていないとか、この人がいなくなったら次どうするんだみたいなところもあったりとか、かなり神事とパッケージ化で揺れているという状況も聞きますね。

齋藤：鎌田先生から「作り手」という言葉が出てきましたが、昔は手仕事が収入として成り立っていたんでしょうけど、現状は安くて大量にあった方がいいというところに流れているので、生業としては成り立ちづらいのかなと。つくる人というのに少し焦点を当てたほうがいいと思っていて、まちなかで何をつくるか、活動をつくりましょうってなった時に、ちゃんと記憶をつないでいくとか、技術もつないでいくとか、いろんな面で考えていった方がいいのかなと思っています。

鎌田：単純に作り手の技術伝承だけでなく、そういう文化がまちなかに表出されていって、人々が意識していくと、少しずつでもそれを受け継いでいくとか、大切にしなきゃいけないという意識が育っていくんじゃないかなと思います。


秋田工業高等専門学校助教の鎌田光明さん

藤：工房の話でいくと、何で秋田市にないのかなって思っているのが、銀線細工工房ですね。小さめでいいのでショップ、もしくは看板だけでもいいんですよ。僕の友達が岡山で後楽園前の古い建物を借りて「金継ぎ屋」という表札を出したんです。実は金継ぎ屋って前代未聞で、歴史上にないんですね。漆職人が片手間でやっていたのが金継ぎです。どうやっているかというと、仕事はネットでしています。デモンストレーションとして金継ぎ屋という看板作りましたが、ネットで注文が結構来るらしい。秋田市にもこういう店あるといいよね。普通の家なのに看板見ると金継ぎ屋かぁみたいな。何代目何衛門みたいな表札つけ

おもしぇど・かだればぁ

　この日のブースでは、今後開催するウォーキング講座や、初参加の一箱古本市などのPRを行いました。今後もさまざまな取り組みを予定していますので、気軽に参加してください。


今年度、部活動が一番活発だった「おもしぇど・かだればぁ」。

サイクリング部

　9月に行った新屋まちめぐりの写真をたくさん貼りだしたり、秋田市が作成した「あきたのまち再発見　ぐるっと文化財マップ」を展示して、参加した皆さんに興味を持ってもらいました。貼りだした写真には、自転車で新屋のまちを目指す途中、いろいろ寄り道しながらまちをめぐる姿もあり、楽しんでいる様子が伝わったと思います。部員は2名からのスタートでしたが、現在は6名に増えています。



「サイクリング部」は、9月に行ったばかりの新屋まちめぐりなどを紹介するブースを設置

て。仕事はネットで受けて。

祭りの話に戻るけども、祭りで使う横笛つくる人がいなくて、困っているという話を聞いたんです。継承していかないといけないですね。祭りの道具、竿燈の提灯屋とか笛屋とか、さすが秋田だなあっていうような技術を。

齋藤：人材育成とかの話をすると き、本当は育てるんじゃなくて育つ環境をつくっていくほうが大事で、まちで遊ぶイベントでやっていますが、遊びを考えられる環境をつくっていかなければいけないと思いますね。

藤：僕らが気を付けていることで、何か面白い活動が発生する要件に、何かをつくらせようという態度って絶対だめなんです。みんなのびのびとすることが許される環境。秋田はそれが一番難しいんですけれど、伝統やすごく強い思いがあるというのは、そういう抑圧されているイメージがあるような気がするんです。

齋藤：藤先生が美大が自由だって、抑圧の話をしてくれたので、タグチさん、高専で学ばれてる立場として、環境はいかがですか。自由にできるとか抑え込まれてるとかありますか。

タグチ：美大にたまに行ったりするんですけども、自由でいいなぁと感じます。みんなそれぞれ個性があるというか。鎌田先生、秋田高専はどうなんでしょうか。うちの研究室とかは、結構個性的ですよね。

鎌田：高専と美大の違いですが、僕は分野の違いだと思います。美術大学は自己表現という部分が大きいので、そういう意味では抑圧じゃない方向が大事だと思うんですけど、うちは工学なので、どうしても抑圧方向に進むことが多いです。ただ、僕の研究室はそのなかでも特殊で、工学を学んでいる彼らにどう自己発散してもらうかみたいなところが大事だと思っています。そういう自己表現のようなものを学んでほしいって日々考えながら教えていますね。

齋藤：「まちなかがっこう」は、まちでこういう表現していいんだとか、こういう活動していいんだっていう気付きになればいいと思っています。

藤：県立美術館の三角形の空間がある階段周りをいいなぁと思って使おうとすると、だめだって言われてしまう。抑圧があるんですよ。この建物で一番魅力的な空間は千秋公園が見える水面じゃないですか。その水面の上に作品を置きたくなりますよね。あそこに置きたいなぁと思って言ったら、置けないらしいんですよ（笑）。

守りたいのもわかるんだけど、どんどん使っていった方が本当はいいんだろうという気がするんです。もっと使える場所ってあると思うんですけど、綺麗な空間とか、スケール感があるとことか。美術館をつくって運営するときに、何を外していくのかってすごく重要で、一つものを見せるためには、そのものを際立たせなければならないので、空間としてニュートラルじゃなきゃいけないですね。そこに消火栓や非常扉があっちゃ嫌だし、スイッチや空調の吹き出し口、照明のレールが見えると嫌だし、でもそのようにできている美術館がやっぱり多いんですよ。美術館も展示空間と言いながらそんなので埋まっていて、一つのものの動きがすごくきれいに見える場所が意外とないんですよね。

齋藤：最近、中心市街地に空き地が出来ると駐車場になってしまうことが多いんですね。このまちなかをもっと楽しくするとか、部活としてどんな活動がいいのかと考えた時に、空き地が出来たら妄想してみようということで、こっそりまちを変えれば、そこからこっそりがつながってごっそり変わる。そういう感じがあって、空き地を見たら、ひっそり何かできないか、妄想する部活があってもいいんじゃないかな。


秋田市企画財政部企画調整課の齋藤一洋課長

藤：「怒られ部」とか。なんかこんなことやると怒られるんじゃないかってことをやって怒られる。うわぁ、やっぱり怒られたって。あと「謝る部」ね。謝るために何かやる。「始末書部」。始末書何枚描いたかっていうのが実績になるとかね。東京で「失敗研究会」をやろうと話していて、失敗が許されない社会なので、これは結構注目されていますね。失敗ができる環境をつくっていくとか、失敗をどんどん体験していくっていうのが、人材教育の中に組み込まれていたり、研修に入ったりもするみたいですね。

齋藤：さっきの育つというキーワードから思うことですが、子供を育てていくうえで、失敗させたくないから最初に挑戦の芽を摘んじゃうっていうか、そういうのを感じるときがあります。失敗や痛い思いを経験したり、怒られたりしても、楽しみ方の幅を広げていくみたいなのがあるといいですね。

鎌田：実は僕も同じようなこと考えていて、昔のまちをCGで再現して、今のまちに照らし合わせると、ポケモンGOとかのようにAR[*19]空間という仮想空間と現実空間の合体ですよね。今のまちにスマホをかざすと、昔のまちが全部見えるとか、さらに発展させると、今のまちじゃなくて、自分たちがどんなまちであったらいいという、未来のまちを勝手に創っちゃって、それを表現するみたいなのをやりたいなとか思っています。

藤：眼鏡みたいなのをかけて仮想空間が見えるやつがありますね。技術がこの数年ですごく伸びていて、5年後ぐらいの美大生はみんなそれやってるんじゃないかな。昔のまちなみをみんなで散歩することができたりしてくるんですよね。匂いとか、音を聞かせたりとかもできたりしてね。そういうのが、実際にできるようになってきましたね。

鎌田：今のまちを見ながら昔のまちが見えたりとか、今のまちが見えながら、未来のまちが描けるとか。今と昔、今と未来とかを自分の頭の思想の中で行き来することが大事だと思うので、どちらかというと、埋没しちゃうよりも、少し見えた方が面白くなってくるんじゃないかと思ったりしています。

齋藤：「あきたまちのキオクラボ」は時間の層、時層なんですね。秋田のまちの降り積もってる時層をちょっと考えようということで、今日は昔の写真にしましたけど、未来の記憶も考えたいねっていうような趣旨です。皆さんも帰りに展示ブースをのぞいてください。昔のまちを知ってる方は是非記憶を描いていただきたいし、せっかくですから会場の方が、私たちの戯言を聞きながら妄想した部活とかお聞きできればいいなと思っています。

今日はありがとうございました。

＊19 AR（拡張現実）Augmented Reality
現実の風景にデジタル情報を重ね合わせて表示する技術。例えば、スマートフォンのカメラをある風景に向けると、画面上に示されたその映像に、映っているものに関する文字情報が重ねて示されるなど。

ブローチ部

各自がつくったブローチを持ち寄ったり、ブローチづくりの道具や材料を持参して、会場で試作会を開催しました。参加した子どもたちも大喜びで、ブースにたくさんの方が立ち寄ってくださいました。「共同部室」のある秋田駅前のフォンテAKITA6階で活動しています。見かけたらぜひお声かけください。


「ブローチ部」は体験試作会を開催し、人気を集めていた

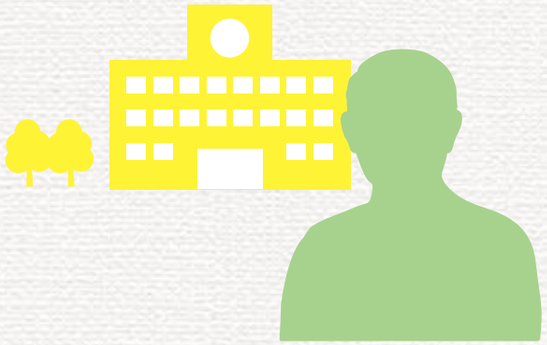
あきたまちのキオクラボ

広小路や秋田駅前、手形入り口、旭川沿いなどの古い写真を40枚ほど特製の段ボールパネルに掲示。それを参加者に見ていただいて、いろいろな思い出を付箋紙に書いて貼っていただくという企画で、たくさんの記憶を集めることができました。


「あきたまちのキオクラボ」は、55年ほど前の秋田市中心部の写真を展示して、注目を浴びていた



ネクストステップ



まちなかがっこぅ校長
徳利八十郎

「まちなかがっこぅ」のこれから

「まちなかがっこぅ」校長の徳利八十郎です。校長に就任して1年になりますが、この間、「まちなかがっこぅ」では、まちを自転車で巡って魅力を発見・体感する〝サイクリング部〟や、まちの記憶や物語を巡ったり、掘り起こしたり、語ったり……、さらには新しいまちの使い方などを考えたりする〝あきたまちのキオクラボ〟など、さまざまな部活ができました。いろいろな興味関心から多くの魅力的な部活が立ち上がり、イベントを含めて、その活動状況はこの「ドキュメントブック」でも紹介されていますね。そして、活動を発信したり、イベントの案内をしたり、共同部室の管理などをしている生徒会事務局もできました。

校長として、これから部活がどのように展開していくのかとても楽しみですが、一つ気になっていることがあります。それぞれの部活と生徒会事務局はありますが、何かが足りないような気がしませんか？ 既にお気づきの方もいるかと思いますが、実は生徒会がまだできていないんです。

ただ、「まちなかがっこぅ」の生徒会は、超ゆるくていいと思っています。部活の皆さんが気軽に集まって、互いに知り合いになりながら、まちをもっと楽しむことを妄想していく。その延長でイベントを企てたり、試してみたりする……。そういう超ゆるい生徒会で十分だと思います……いや、それが理想です。

校長・徳利八十郎としては、部活の皆さんにぜひ超ゆるい生徒会を立ち上げてもらいたいと思います。どの部活にも共通しているのが「まちに関わり、まちを楽しむ！」という思いではないでしょうか。興味関心や活動はそれぞれ違っていても、その共通する思いを抱き、部活を立ち上げた皆さんが、自分たちで「まちなかがっこぅ」をつくっていくということも、まちを楽しむ活動の一つなんじゃないかな。すると、それぞれの部活ではなかなか実現しないことも、みんなで協力し合えば実現できたり、新しいアイディアが浮かんだり、普段知り合うことができない人たちとつながることで、活動の幅が広がるのではないでしょうか。

「まちなかがっこぅ」のこれからということで、気になっていた生徒会について書いてみましたが、他にもそれぞれの部活がさらにまちを楽しむために、さまざまな団体が行うイベントや勉強会に参加して、さらに新しい人とつながったり、いろいろな考え方を知ったりすることができれば、さらに楽しい部活になると思います。

みんなでまちを楽しもう!!

2019年3月

まちなかがっこぅ校長
徳利八十郎

ネクストステップ

未来の文化(価値)を創り、楽しむための一歩

2015年度(平成27年度)の(仮称)あきた芸術祭の検討からスタートした取り組みが、市民の皆さんや市内外の専門家・研究者の皆さんとの意見交換を経て、「アーツ秋田構想」としてまとめるに至りました。(24ページ参照)

ディレクション会議などで積み重ねてきた議論は、アートや芸術という言葉を定義するためのものではありませんが、構想名に〝アーツ〟を用いた背景についてお伝えしたいと思います。

私たちは、アートというと絵画や彫刻、舞踊や舞踏などの制作物や作品、食や文学、伝統芸能など、既に形づくられているものをイメージし、限定的に捉えがちですが、それだけではない、さらに大事なことに気づかされました。

例えば、昨年度のシンポジウムで芹沢高志さんが、芸術を「術」(動詞)として「場所の力をもう一度解放させる機能」と述べ、第1回「夜楽」において石倉敏明さんが「アートという言葉は(中略)広い意味で人間が何かを行う技術のこと」と話しています。(「ドキュメントアーツ秋田構想　2016〜2017」参照)

これまでの議論の積み重ねから、私たちは、「新しい価値を生み出し

今年度の第4回ディレクション会議において、藤浩志さんが「今までの価値に対して、そのままでいいのかと問いかけ、新しい価値を創っていくこと」と述べ、服部浩之さんが「アートという言葉は、人によってかなり異なったものを想像すると思う」としながら、「アートという形式を重視するのではなく、さまざまな行為に創造性や価値を見いだすこと、暮らしを営む中で新しい社会を創っていこうという態度自体がアートにつながる」と話しています。(17ページ参照)



ていくための多様な創造的活動」がアーツ(アートの複数形)であり、日常を見つめ直し、日常にひそんでいる新たな価値に気付くきっかけを与え、人と人とをつなぎ、未来の秋田、未来の文化を創っていくものと捉えました。

このような考え方をもとに、私たちは構想名を「アーツ秋田」とし、秋田市における今後の芸術文化によるまちづくりの方針を示すものとしてまとめ、その具体な取り組みを「文化創造プロジェクト」として進めることとしました。

既にトライアル的な取り組みとして、市民が自らの興味関心を、まちに関わりまちを楽しむ〝まちの部活〟として具体化する「まちなかがっこう」(部活プロジェクト)を実施しており、多くの部活が活動を開始しています。(32〜39ページ参照)

まちの部活のように、このまちに暮らし、関わる人たちが、創造力を高め、発揮し、多くの人とつながりながら、多彩なプロジェクトを展開していくことが、まさに未来を創っていくと考えます。

そして、私たちは、来年度、アーツ秋田構想の具体な取り組みである文化創造プロジェクトを(仮称)秋田市文化創造交流館を拠点に、2020年度から本格的にスタートするための準備や実験的な取り組みに着手します。

このプロジェクトは、イベントを企画・実施し、その観客数や消費額など、短期的経済効果を目指すものではありません。人やまちが未来に向けて〝底力〟を高めていくための取り組みです。昨年度のシンポジウムにおける芹沢高志さんの言葉をお借りすると、私たち一人ひとりが〝精神の基礎体力〟を高めていくための取り組みということも言えると思います。(「ドキュメントアーツ秋田構想　2016〜2017」参照)

超高齢社会に突入し、特に次代を担う子どもたちの数が減少する中で、医療や福祉、コミュニティなどの身近な課題から、貧困や差別、地球温暖化などの世界的な課題まで、人間社会を包み込む環境全体に関わる課題は増える一方です。これらの多くの課題に対して、社会のシステムやそのベースとなる人の考え方を変えていくことにつながる生態学的な視点での試みです。

このまちに暮らし、関わる人たちが、未来の文化(価値)を創る主体者として、市内外の専門的な知識や経験、技術を有する人たちとつながりながら、〝未来に向けて、新しい価値を生み出していくための創造的な活動〟を実践していくための一歩を、ともに踏み出しましょう!

この続きは、〝実践の場〟で。

「to be continued……」

ドキュメント　アーツ秋田構想　Document for Arts Akita

2019年3月　発行
企画・発行　秋田市企画財政部企画調整課
〒010-8560
秋田市山王一丁目1番1号
TEL：018-888-5462
FAX：018-888-5463
http://arts-akita.net
E-mail:ro-plmn@city.akita.lg.jp

制作　NPO法人あきた地域資源ネットワーク
編集　鐙　啓記（NPO法人あきた地域資源ネットワーク）
　　渡邊　由紀子（NPO法人あきた地域資源ネットワーク）
　　髙橋　ともみ（ライター）
デザイン　細田　記美子（Chiki design）
写真　小阪　満夫（小阪写真事務所）
　　鄭　伽倻（小宇宙感光）
　　鐙　啓記（NPO法人あきた地域資源ネットワーク）